JAPAN URBAN DESIGN INSTITUTE
都市環境デザイン会議
東京都文京区本郷2-35-10
本郷瀬川ビル 〒113-0033
TELEPHONE 03-3812-6664
FACSIMILE 03-3812-6828

JUDI
070
20.JANUARY 2003
特集 人と場の活性化ー佐世保市

●特集：人と場の活性化ー佐世保市
1．佐世保の都市デザインの展開に向けて… 1
2．有機的な人の時間と街づくり…… 5
3．街づくりを楽しむ…… 7
4．まちは財産…… 9
5．「九十九島の会」の活動……11
6．自然環境の息づく街ｰﾊｳｽﾃﾝﾎﾞｽｰ……14
7．港とまちの一体化を図る……16
8．街づくりを開かれたプロセスで……18
9．佐世保の都市景観について……20
10．街づくりの意識改革を目指す……22
●委員会活動報告……24
●ブロック例会レポート……25
●事務局より……26
●編集後記……26

発行者：都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

特集：人と場の活性化ー佐世保市

特集 1

佐世保の都市デザインの展開に向けて

西脇 敏夫
NISHIWAKI TOSHIO

佐世保市

〈美しい西海の自然に抱かれた街〉

九州の西端にある佐世保は「美しい西海の自然に抱かれた街」である。そしてその地理地形故の「軍港の街」であり「九十九島（くじゅうくしま）」「西海橋」「ハウステンボス」などのある「観光の街」である。

中心市街地には、延長約１ｋｍの直線で伸びるアーケード街「三ヶ町・四ヶ町商店街」があり、年間を通して一日中人通りが絶えない。他所の都市から訪れる人々からは、今日の経済状態の悪い時代に、しかも日本の最西端にあって人口が減少しつつある２４万都市で、どうしてこんなに人通りが多く賑わっているのかと、不思議がられる商店街である。ここでは折々に、市民が会費を出し合って大パーティーが開かれる。巾１０ｍ長さ１km の商店街の通りが大パーティー会場に化して盛り上がる。

一方郊外部には、北部に港街「相浦」、南部に街道の街「早岐」、西部に陶磁器の街「三川内」など、それぞれの歴史を背景にした個性ある街がある。

「ひと・交流創造都市（人々が交流し、豊かな生活を創る街）」を目指す佐世保の街づくりの活動は、行政、地域コミュニティー、テーマコミュニティー、企業など様々な立場で行われているが、今回はそうした中から何人かの方に、それぞれの活動内容と活動にかける思いを述べて頂いた。

全体として「人と場の活性化」というテーマに対する佐世保の状況が浮かび上がればと思うとともに、会員諸氏に佐世保に対する理解と興味をもって頂ければ大変に有り難いと思っている。

「港まち佐世保」の三本の都市軸

アーケード街の大パーティー

〈軍港の街は近代化遺産の山〉

佐世保港は、緑の丘陵に囲まれた佐世保湾の奥深くにある港である。

この天然の良港としての地形から、明治１９年に海軍鎮守府の設置が決まったことによって、佐世保の街は誕生し、発展してきた。明治３５年には、村からいきなり市となっている。

第二次大戦の敗戦後は、商港都市として生まれ変わろうとしたが、その矢先、朝鮮動乱によって再び軍港都市の道を歩むことになった。戦災を受けなかった軍施設は、多くの港湾施設が米軍により接収され、海上警備隊（後に海上自衛隊）の地方総監部も設置された。

そして現在、佐世保港の水域の８３％は米軍による制限水域となっており、水際線に面した土地の多くは、米軍、海上自衛隊、佐世保重工業の施設によって占められる。

そのため街と港の接点は、ほんの僅かであり、一般市民が日常生活の中で直接港に触れる場所はほとんどない。

これらの施設の中には、赤レンガ倉庫などが数多く残って使用されており、また市内の各所には水道施設など様々な近代化遺産があって、今なお現役施設であるものも多くある。

また、軍施設用地の一部は公園、病院、学校等多くの公共施設に転用されている。

経済的にも軍港があることによるところが大きく、第三次産業人口比率は７５％を占め、市民生活を支える経済活動や街づくりに関する対応、市民気質などにも、直接間接に強い影響を与えていると思える。

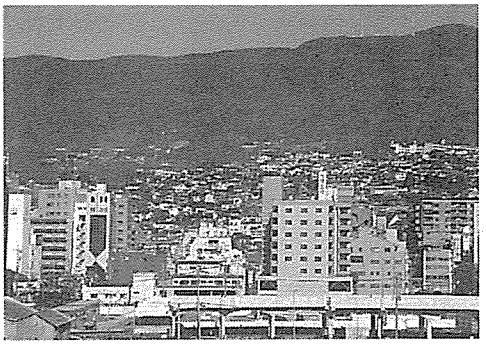
〈長崎市を上回る観光客〉

リアス式の臨海部は、いくつもの湾や入江が複雑に入り組み、その緑と水面が織りなす構成は非常に美しい。佐世保湾や大村湾もそれらの一つであるが、西海の海に大小２０８の島々が浮かぶ九十九島は、他に類を見ない見事な風景だと思う。その玄関口である「西海パールシーリゾート」から、この自然を愉しむことが出来る。

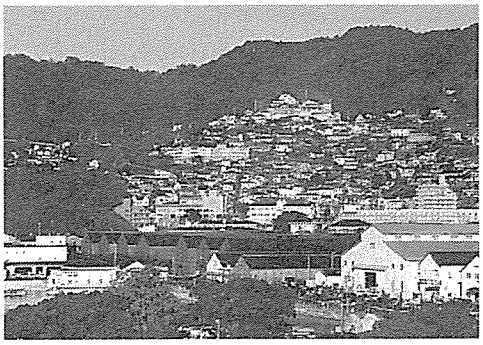
平成４年に佐世保市の南端の大村湾に面した地に、工業団地用の埋立地を活用して誕生したハウステンボスは、生態環境に対する配慮とオランダの街を忠実に再現したテーマパークである。四季折々の演出がなされ、内外から一躍多くの観光客を呼び寄せることとなり、佐世保市は観光都市としての性格を大きく強めることになった。

それまでは、西海橋や九十九島などが観光の拠点であったが、ハウステンボスが開業してからは佐世保市全体の観光客数は平

「港まち佐世保」風景

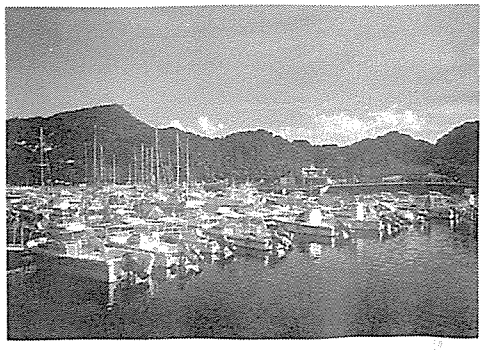


緑の屏風を背景にする市街地風景



斜面住宅地と赤レンガ倉庫群

「九十九島」夕景



「西海パールシーリゾート」

成３年の約２３５万人から平成５年の約５４８万人へと増大している。

現在佐世保市には、長崎市を上回る県内で最も多い観光客が訪れている。

さらにハウステンボスを含めた観光ポイント全体の連携によって、相乗効果を如何に生み出すかが課題である。

そのためにも、中心市街地である「港まち佐世保」の魅力を向上させ、「九十九島」「ハウステンボス」などの観光資源を上手くネットワークする方策を強化し、回遊性を高め、人々が交流し街を活性化する街づくりを進めることが求められている。

観光は、これからの佐世保にとって重要な産業であり、来街者にとっても魅力的な街にすることが街づくりの大きな目標の一つである。

〈明快な中心市街地の骨格パターン〉

「港まち佐世保」は、緑に包まれた佐世保港と、そこから佐世保川沿いに伸びる谷間の平地に、細長いかたちで広がる中心市街地との全体像である。自然に抱かれた街並のスケールとその構成のバランスが美しい。

この中心市街地を縦断する、国道３５号と「三ヶ町・四ヶ町商店街」、そして「佐世保川」という３本の性格の異なる軸線は、平行するかたちで街の骨格となり、都市軸を形成している。

中心市街地を囲むかたちで斜面住宅地が広がり、その斜面地を含む周辺地域へは、この都市軸を幹として街路が枝状に分かれていく。

こうした市街地の構成が、「三ヶ町・四ヶ町商店街」の賑わいを生み出す一つの要因になっていると思える。

しかし、市街地と港が接する所には鉄道の駅と貨物ヤードが横切り、その港側には市場や港湾関係の施設が立地していたため、街と港との直接的なつながりが切られていた。そのため、鉄道の港側は駅裏と呼ばれていた。

〈名実共に「港まち佐世保」へ〉

現在、佐世保市では、佐世保駅周辺において、佐世保にとっては１００年に一度ともいえる大規模な事業が、様々な事業主体によって進められている。長い間見慣れてきた駅前の姿が、大きく変わりつつある。

これは佐世保駅周辺再開発事業として、旧建設省、旧運輸省、長崎県、ＪＲ九州等とともに佐世保市が推進してきた一大事業である。

この再開発事業で生まれる、港に面する新しい街によって、中心市街地と港が直結することになる。佐世保の街づくりにとって、この事業の意義は名実共に「港まち佐世保」になることだと思う。

その基盤整備事業である土地区画整理事業とポートルネッサンス２１事業は、それぞれ平成１５年度と１６年度に終了する。街づくりが基盤整備から土地利用に変わり、建物などの上物整備が進められていくことになる。

計画当初の頃と大きく変わっている社会経済状況の中で、事業上は非常に厳しい環境にあるが、これまでにない「港まち佐世保」の魅力と特徴を創り出す機会であり、長い目で見ながらその可能性を求めていかなければならない。

〈求められる総合的判断と主体的行動〉

佐世保市の都市規模や都市活動の状況から、現時点では佐世保駅周辺再開発のような大規模事業は、当分予定されないと考えられる。

しかし中心市街地においては、市役所周辺の整備計画や小学校跡地計画などの公共施設再整備、民間の再開発計画やマンション事業などの市街地再整備の動きがある。また斜面住宅地の問題や、大都市とは違う状況にある市街化調整区域の問題などの検討も進められている。

人口の減少傾向をふまえ、こうした動きをそれぞれ個別にではなく、佐世保市全体の街づくりとして総合的に捉え、そのあり方を考えていく必要がある。その中で中心市街地の問題も考えていかなければならない。そして、佐世保市として街づくり全体の目標に向かって主体的に判断し、行動することが大切である。

佐世保川

国道３５号

三ヶ町・四ヶ町商店街

しかし、佐世保市のおかれている様々な面での立場や状況からは、現実には容易ではない面もあるが、こうした姿勢を持って、可能な限りの努力と取組みを実践することが必要であろう。

〈協働の街づくりへの道筋を探る〉

中心市街地の活性化は、こうしたこととともに、日常的な街づくりの中で、都市空間全体を質の高い魅力的なものに育てていく視点を取り入れることが重要である。

交通バリアフリー基本構想をふまえた歩行者空間整備の推進や建築物の誘導等を含め、快適な市民生活の場の形成を図るために、街づくりに関わる様々な立場の連携と協働が必要である。

高速道路の高架構造問題等もあって、生活者としての市民の発言も活発になってきているし、様々な活動も行われている。こうした市民の街づくりへの意欲の高まりや、行政の意識改革などによって、芽生えている芽を育て、健全な協働関係による街づくりに発展していくことが期待される。

この美しく優しい自然の中で生活する、行政市民、地域コミュニティー市民、テーマコミュニティー市民、企業市民などが協働して、その資源と特徴を生かし、来街者にも誇れる魅力的な都市空間を育てる関係が、つくりだされていく道筋を探っていかなければならない。

〈都市デザインは実践学〉

こうした街づくりによって推進する都市デザインは、それぞれの地域でそれぞれに実践を積み重ねることが重要なことと考えている。

街はそれぞれに異なり、呼吸をし、常に姿を変える生き物のようなものであるという実感からである。

都市デザインの活動は、複雑な現実の街を相手に、そこでの市民生活と都市環境に関して、将来に伝えたい価値を生かしながら、さらに新たな価値を生み出していこうとする街づくりとしての創造活動である。

いわば当たり前のことを、当たり前のこととして行おうとしているわけであるが、実際は言うが易く行うは難しである。

街づくりは、関わる様々な立場の多くの人々によって行われていくことであり、その時々の社会経済状況だけでなく、関係する人々の価値観、エネルギー、力量などや、様々な人間関係などによって、テーマや取組み方法、プロセスや結果が変わってくる。

そのため、一人の人格による創造活動とは違う、非常に複雑な創造活動であり、またその活動は、街の動きとともに継続していることが必要である。

〈街づくりのプロセスの中で〉

自分が佐世保市に赴任したのは平成１１年４月である。佐世保駅周辺再開発事業は、鉄道の高架化事業が２年後の完成を目指して躯体が姿を現し、区画整理事業は基盤施設の工事とともに、仮換地を終えた所から文化ホール「アルカスさせぼ」や再開発ビル「潮見エスプラザ」「戸尾アルファ」などの建築工事も進んでいた。また、港側のポートルネッサンス２１地区の埋め立て工事も既に始まっているという時期であった。

その一方で、鉄道と埋立地の間に都市計画決定された西九州自動車道の高架構造に対して、反対する市民団体の活動が盛んに行われていた。市や市議会をはじめ、事業主体である旧建設省や長崎県を巻き込んでの論議が続いていた。

そうした状況の中で、先ずは進行中の佐世保駅周辺再開発を、事業の側面からだけでなく、街づくりの観点から歩行者の視点などで捉え直すこと、その中で高架構造問題をどう解決していくかということなどが先ず取組むべき課題と思われた。そして、これらのことを中心に、関係者と議論をしながら調整を続けてきている。

様々な活動の蓄積で形成される都市環境の質を高め、育んでいくためには、街づくりに関わる人々が、全体の目標とそれぞれの役割を共通認識とすることが望ましい。だが、立場によって価値観も異なり、事業の進捗状況等もあるため、全ての要望を満足させるということはまずない。

しかし、極力多くの関係者の同意と協力を得ながら、都市環境全体としての価値を創り出していく努力が必要であり、そのプロセスが重要である。

そのことは、結果にも大なり小なり反映されるはずである。そのためには、些細な事と思われる事もあきらめずに取組む姿勢が必要だと思って努力を続けている。

日本の西の端にある都市、軍港という言葉のイメージとは異なる、美しくおだやかな海と緑に囲まれ、ヒューマンスケールの都市環境と市民生活がある街の、街づくりの実践の現場で、都市環境デザインの可能性を探りつつ、職員や市民の人々と共に考えながら、活動を継続させていきたいと考えている。

特集　2

有機的な人の時間と街づくり

小川　照郷
OGAWA TERUSATO

佐世保景観研究会副会長
タウン誌ライフさせぼ
編集長

時間が街を造っていく。長い時間の蓄積の末に、独自の持ち味をもった都市が形づくられていくのだろうが、それは単に時間という無機的なものの量ではなく、そこに住む人たちに営まれた、有機的に絡まった目に見えない集積だ。もちろん地形的なもの、自然が及ぼす力は動かし難いのだけど。

佐世保市は今年、市制１００周年を迎えた。イベントが目白押しで、市民の元気な息吹に満ちていた。ジャズライブ。ダンスパフォーマンス。ミュージカル。芝居。マリンスポーツのイベントなど……。

そのいくつかはポートルネッサンス２１計画の港の埋立地で実施された。何万人もが集える１２ヘクタールの広さがあってこそ、祭りは盛り上がりを見せた。また、昨年出来たばかりの『アルカスＳＡＳＥＢＯ』の２０００席の大ホールも「全国豊かな海づくり」など大イベントを実施可能にした。

いま佐世保駅周辺は、鉄道高架と高速道路整備を機に、区画整理事業による街づくりが起こなわれている。顔である港と駅の周辺が変貌していく様は、まさに街が生きもので、人間のように成長してものだと実感させる。

明治３５年に市制施行された佐世保市は、百歳になった。百歳の街を人間に例えると老人ではないだろうが、少年というわけもないだろう。海軍の鎮守府開設で佐世保は村から市へと一気に発展した。隣接の村から町から人々が集まり、にわかに膨れ上がった。そこに住む人々による緩やかな発展ではなく、国家の力で生まれたのだ。

近年、ようやくよそ者意識も消えて、佐世保を自分の街とする世代による街づくりを考える芽生えがある。となると、やっと自覚した青年になったのかな、と思う。百周年のさまざまなソフトイベントは、その若者らしい表現であり、証明なのだろうか。

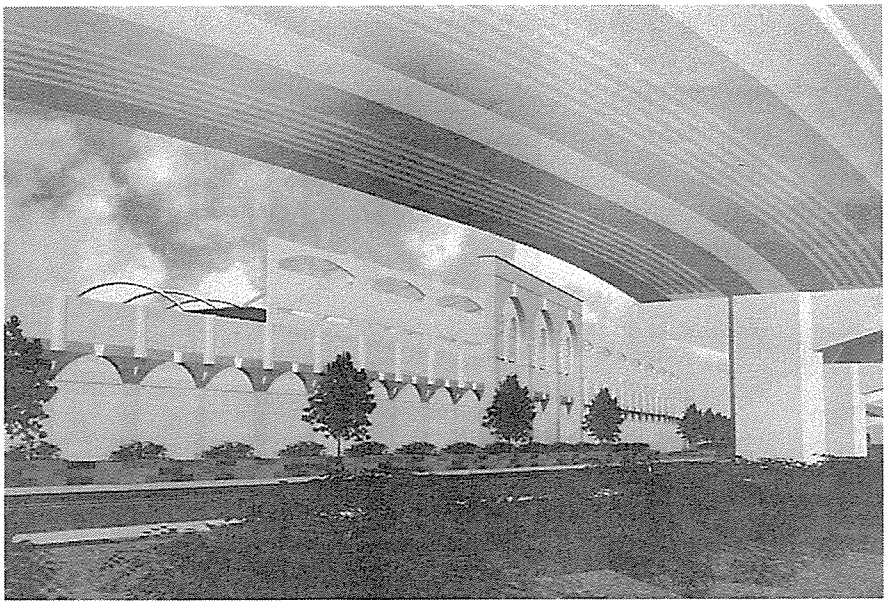
さて、ソフト事業は充分だったけどハード面はどうだろうと見回すと、駅周辺開発が目につく。このハード事業にどれほどの市民合意があるだろうと考える。その計画に佐世保が関わった痕跡はほとんどない。鉄道高架やポールネ２１計画がそうであるように、全国一律の事業である。

「どうして自分が住む街を、市民が考えられないのだろう……」

高速高架道にぼくら『したかネ、こがん街会議・佐世保景観研究会』が反対したのは、実にそれなのである。デザイン、構造の問題ではなく、市民も役所も市長さえ知らない間に、すべてが中央で決定した後で知らされる、ということだ。決定されたものを市民が変更を迫ることは不可能だ。考え方もさまざまだからデザインや構造の問題でないのは証らか。決定の仕方、市民参加のあり方こそが問題なのであろう。

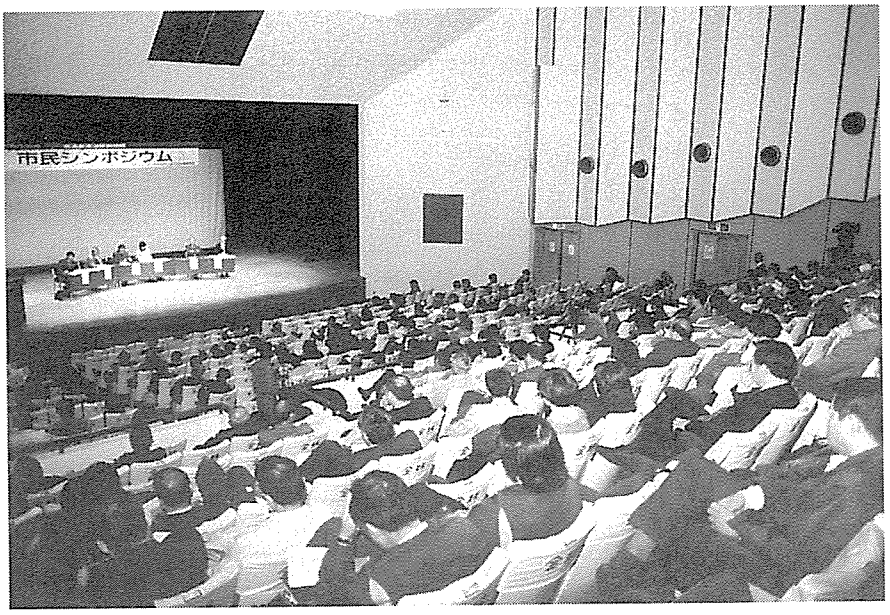
前述したように、海軍鎮守府が佐世保に来たのは、海があったからである。この２４万都市の賑わいのほんの傍に、九十九島がある。昭和３０年に制定された西海国立公園だ。倭寇や松浦党の歴史を持ち出すまでもなく、この辺りの人々は古くから海と関わって生きて来た。『心やさしい海辺のまちへ』が街づくりのキャッチフレーズとなっているのは、市民の誰もが海が大好きだからである。

ところが、９８年４月に『佐世保みなとインター』が完成し、その延長として西九州自動車道が佐世保湾沿いを通過する。い



当初の計画完成風景

わば、街と海とを巨大なコンクリートの帯が分断するのである。
「おかしかたい、海の見えんごとなるばい」「なしてわざわざ海辺ば通るとね」
市民の声が聞こえ出してきた頃、ぼくも疑問をもった。調べてみると、市や市議会で景観についてほとんど論議されていないことが判った。議員の怠慢は甚だしい。
そもそも事業そのものは、８７年６月に閣議決定された『第四次全国総合開発計画』によるもの。それまでぼんやりしてたのが悪いというわけだ。だが、そうだろうか。情報が市民サイドになかったのだ。『みなとロインター』が完成して、「その先どがんなっと？」と市民はやっと、想像力を働かせ出したのだ。まったく遅いのだが、情報から遠ざけられた市民とはそういうものである。
「もう決まっとるけん、どがんも出来んよ」というのが答えであるが、ぼくは「高速道路が海と街を切り裂く！」と題して、自分のタウン誌に特集記事を組んだ。それは話題を呼んで、漠然と不安を抱いていた市民に火を点けることとなった。
鉄道高架と高速道が二重の壁となって、街と海を隔てる。高速道が大きな屋根となって普通道路に覆い被さる。そして驚かされたのは、当面は二車線だけで、採算がとれるまで四車線にはしない。荒々しいコンクリートの桁が突き出したまま、半永久的にデザイン未完で放置されるというもの。それが駅の玄関、市民の顔である海辺にである。
９９年３月、ぼくらは『高速高架道景観問題・市民シンポジウム』を開催することにした。多くのカンパが集まり、市民の意識が高いというのが判った。基調講演は田村明さん、法政大学名誉教授・まちづくり学会会長だった。
「出来れば通らないで欲しい。これより先に高速は必要ない」
「景観が台無しだ。海が見えなくなる」
「高架が圧迫して鬱陶しい」
さまざまな意見が出され、アンケートの結果、高速道が景観に問題ありとするのが８９パーセント、経済浮揚の効果には７５パーセントが関係なしとし、高架をやめて平面道路に、という意見が８０パーセントだった。
最近マスコミを賑わす道路公団見直しの論議を見ていると、地方都市はすべて高速道を渇望しているという論調になっているが、佐世保市民の場合は、もうここまでで充分というのが、大方の意見のようだ。
「いまさらなんば言うても同じさ」
「せめて二車線にしてもらって、完成形で出来ないかな」
「国際通りの楠並木は保存して欲しか」
都市の景観を大切に思う人々が増えているのは事実である。いままでのように経済効果だけで公共事業を考える人種は少なくなった。そこに住み暮らしている生活者の視線こそが、街づくりには大切なのだ。全国一律の都市ではなく、その文化、地形や自然、歴史を生かしたやさしい街づくりを多くが望んでいる。それがぼくらの活動の中で見えてきたものである。
市民が創り出していく時間の有機的な絡み合い、それが生み出すものを信じたい。それには正しい、早い段階での情報開示と、市民自身の参画意識が不可欠だろう。佐世保はまだまだ、百歳の青年なのだから。



高速高架道景観問題・市民シンポジウム

特集　3

街づくりを楽しむ

竹本　慶三
TAKEMOTO KEIZOU

させぼ四ヶ町商店街協同組合副理事長
きらきらフェスティバル実行委員会幹事長
Yosakoiさせぼ祭り実行委員会実行委員長

その昔、商店街には、ぬくもり・賑わい・ふれあいがあり人間臭さに満ち溢れた場所であった。子供からお年寄りまで誰もが快適に楽しめ一日中居てもまったく飽きなかった。

「街」は人々が「過ごしたい」と思う場所であり、本当に居心地のいい場所である。

人はいつも人がいるところに行きたいもの、集まるもの。人は人の群れる場所に惹かれ、商店街にやってきたもの。あふれる活気に惹かれ、人々は街にやってくる。

しかし時代と競合するのが商売の宿命、郊外大型店やディスカウンターの台頭でショッピングの形態が大きく変わろうとしてきた。

危機感がそのスタートであった。１９９６年秋、中心市街地から７キロ離れた大塔地区に 22,000 ㎡の売り場の「ジャスコシティ大塔」がオープンする。

その出店表明があった１９９５年、三ヶ町商店街と四ヶ町商店街、その真ん中にある百貨店玉屋が一致団結。海軍鎮守府時代から戦後も基地依存の街であり県北の中心消費都市としてぬるま湯につかったような殿様商売から脱却、「人が集い、賑やかさが賑やかさを呼ぶ、活気あふれる街づくり」に向け立ち上がった。

商店街の役割には「買い物をするという経済的役割」「人が出逢う交流の場という社会的役割」そして「情報発信し市民参加型のお祭りがある文化的役割」がある。どちらかというと経済的役割だけですんでたものから、文化的・社会的役割が必需になってくる。

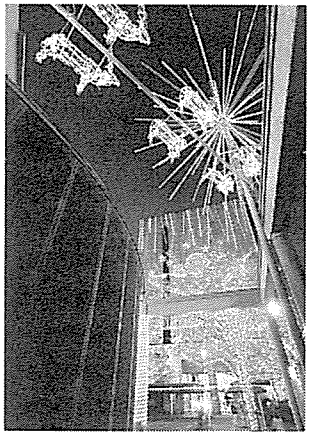
「街中をイルミネーションでキラキラさせたらいいなあ。それも中央商店街の真ん中の公園でやったらどうだろう。光ってのは人の心を和ませる。」という夢を見て始めたのが、「きらきらフェスティバル」である。市の商店街イベント事業での補助金１５０万円を基に、三ヶ町・四ヶ町両商店街と玉屋デパートで４５０万円合わせて６００万円の予算で企画した。

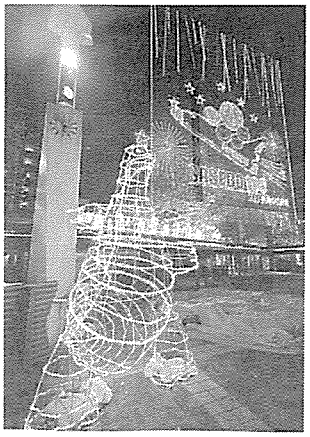
公園に隣接して美術館がある。その壁面をキャンバスにして光の絵を描こうとか、バボット人形のサンタを乗せようとか、木々をイルミネーションで飾ろうとか、サンタ郵便局をつくろう。きらきら郵便局にはログハウスが似合うぞとか、市民みんなで「喜びの歌」を明かりの下で歌おうとか、さまざまな夢が語られた。

予算を積み上げたら１０００万円の予算になった。普通であるなら６００万円の予算まで見つめなおすのだが、「われわれは商売人だ、行政のように予算に合わせた計画を立てるのではなく、計画が実行できるよう予算を集めたり工夫をしよう。マイナス発想ではなくプラス発想でいこう。足りない４００万円をどうやって集めるかを考えよう。」そういう発想から「５０００人のきらきらチャリティー大パーティ」が生まれた。せっかく日本一ともいわれる全長９６８m、直線で１ｋm近いアーケードがある。これを使って何か出来ないか？確かパリの万博で一万人の大パーティがあったはず。こんなパーティが出来ないか？テーブルの長さを測ってみると、５０００人くらいならアーケードの中で出来そう。一人千円ご負担いただき５０００人で５００万円。ビール会社その他からご協賛いただき、食べ物は持ち込みでという形で開催、約２００万円くらいの収益が出た。

しかしそれでも全体的には不足が出る。そこで、佐世保の顔である中央商店街が元気を出す為に、又市民の皆様に喜んでいただく為にと、足で稼げとばかりに、企業応援団・市民応援団など協賛金のお願いにまわり、約４００万円くらい集めた。

１１月下旬からクリスマスまでの期間中イルミネーションだけではなく様々なイベントを仕掛ける。「点灯式」に始まり「キッズワールド」「きらきらチャリティー大パーティ」［Yosakoi 交流会］「市民で歌う喜びの歌」「ミュージックフェア」「きらきらウェディング」「イブの佐世保に雪が降る」「キャンドルを灯そう」等、毎週イベントが目白押しだ。当初１５０万円の補助金でのスタートが７回目の本年は、佐世保市制百周年のシンボルイベントとして取り上げられ、県・市の補助金が１５００万円





「きらきらフェスティバル」
メイン会場風景

自己負担金８００万円　企業や市民協賛金５００万円　事業収入４００万円の合計３２００万円という大事業になっている。予算からスタートしていたら成功していなかった。やるんだと決めてからのフットワークの軽さ、少々のリスクを背負ってでも商店街を孫の代まで残していこうという活力が成功につながった。

又、会議のやり方も工夫し、昼間やってた会議だけでは時間が足りず、早朝の会議をやり始めた。「朝７時に１０００円持って集まれ！」ホテルの会議場を只で貸してもらい、朝食を食べてから、店を開く前までの会議である。我々商店街の人だけではなく、行政関係も一般の人も来て下さい。強制ではなく来る人拒まず自由参加。決定する場ではなく、いろんなアイデアを出す場というかたちでやった。みんなの意思の疎通、情報の共有が出来、最初は不可能と思っていた企画が、具現化され「きらきらフェスティバル」の大成功につながった。

「きらフェス」が終わり一段落した２月初旬、若手のメンバーがあの朝会議を又やろうという声が上がった。自分の街の、いや佐世保の街の将来を語ろうという事で「若者・ばか者・よそ者　夢会議」という朝会議を始めた。

その会議の中で、札幌の「Yosakoi ソーラン祭り」のビデオを見、この祭りは凄い。面白そうだ。行ってみようじゃないか。ということで盛り上がり、みんなに呼びかけ３４人が参加、６月に自費で札幌に行き、お祭りだけを見に行った。見た感動で、「こんな祭りをさせぼでもやりたい」「こんなチームの踊りを佐世保の市民にみせたい」こういう話が参加者から聞こえてきた。

翌９７年の１１月の「おくんちさせぼ祭り」におくんちの当番町の上京町「喧嘩独楽」と、中央商店街の「さるくシティ４０３炎の舞」の２チームがよさこい踊りで参加、旋風をおこした。

９８年「おくんちさせぼ祭り」のイベントとして「第１回ダンスバトル」が６チーム８００人の踊り子の参加で開催された。以来年々増加を続け、２００２年の今年「第５回 Yosakoi させぼ祭り」は市内１４会場・北は北海道から四国・東海・中国・九州各地から参加１０２チーム・踊り子７５００人の規模に膨れ上がった。（表）

「見てたのしい、参加してたのしい」のが祭りの特色だが、それにプラスするのが「感動」だ。踊りをする時の躍動感、終えた時の充実感、仲間との連帯意識の高揚など、言葉では言い表せない感動がある。昨年参加した人達はいう「次もぜひ参加したい」と。この祭りは佐世保市民だけの「地域限定」のものではない。多くの人達の交流がある。県内はもとより、遠く北海道から多くの参加者があることからも人気の高さををうかがえる。

「佐世保に来てもらって元気をつけてもらえば幸いです。踊りは上手，下手の問題ではなく、参加してみんなが楽しむもの。思い出と感動を佐世保で味わって欲しい」と念じている。

踊りは人間や自分を素直に表現できる「芸術」である。街中が熱気と歓声に包まれ、老いも若きも心がひとつになり進んでいく姿は街に新たな活力をつけてくれる。

音楽も振り付けも衣装も、参加者自ら創造していく。過去をベースに年々新しい踊りが誕生し、絶えず進化していく、又誰もが気軽に参加出来て、誰もが主人公になれる祭り。

「我ぞ我ぞ」の気持ちを抑えきれない。隣の踊り子と競い合って、他のチームとも競い合う。その情熱こそが逆に、一つの調和を生み出している。

人々が自由な発想で創意工夫する。持っている魅力を最大限に発揮しようと努める。舞台の主人公を目指して互いに競い合う。そうした個性のぶつかり合いは、街に賑わいや活気をもたらし、全体の調和を生み出す。

お祭り（イベント）を仕掛けるにあたり、お祭りをすることが目的ではなく、「まちおこし」が目的で、その手段としてお祭りがあるということ。市民の皆さんの元気の源・活力の源になればと思っている。

「事業は夢で始まり情熱で発展させ、義務感と使命感で成功させる」

「活力あふれるYosakoiさせぼ祭り」の総踊り

Yosakoiさせぼ祭り開催状況　（単位：チーム、人）

	名　称	チーム数	参加人員	会場数
1997年	おくんちさせぼ祭り	2	200	
1998年	第1回ダンスバトル	6	800	1
1999年	第2回ダンスバトル	15	1,500	5
2000年	第3回Yosakoiさせぼ祭り	43	2,500	9
2001年	第4回Yosakoiさせぼ祭り	67	5,000	12
2002年	第5回Yosakoiさせぼ祭り	102	7,500	14

2002年 Yosakoiさせぼ祭り
地域別参加状況

地　域	チーム数
佐世保市内	35
市外　県内	27
県外　九州内	23
中国地方	9
東海地方	2
四国地方	3
北海道	3
合計	102

特集 4

まちは財産

川上　順
KAWAKAMI ZYUNN

赤煉瓦探偵団副会長
都市環境デザイン研究会副会長
Yosakoiさせぼ祭り実行委員会事務局長
きらきらフェスティバル実行委員会コーディネーター

赤煉瓦探偵団の活動

私の住む佐世保には明治・大正期の赤煉瓦の建造物が多数現存する。その数は１４０以上。赤煉瓦倉庫によるまちづくりで知られる舞鶴を越え日本屈指の集積数であることが確認されている。

これら赤煉瓦建造物を歴史的な地域の資産としてとらえ、調査研究する「赤煉瓦探偵団」は、平成１０年３月、市民グループ「都市環境デザイン研究会」と佐世保市役所内の自主研究グループ「させぼアーバンデザイン研究会」のメンバーで結成された。その発端は、京都育ちの私が佐世保に移り住んで１５年が経った平成２年、当時の私は、これからも住み続けるこの街なんだから、気持ちの良い街に住みたい、何か自分にできることは無いのだろうかと考えていた頃に遡る。当時は雲の上の人と思われていたマルチプロデューサーの浜野安弘さんの、話しを聞きたいというある市民の想い入れが発端「浜野安弘講演会」企画され、私もその発起人のひとりとして参加した。

しかし、その企画は後援も得られず、講演会はやむなく有料とした。「人の話にお金を払うなんて佐世保では誰も集まらない」と揶揄されながらも、３,０００円の会費で決行することにした。しかし、私も前代未聞の企画に自信半々、来佐した浜野さんにもプレッシャーをかけた。四ヶ町を歩き、海を見てもらい、弓張岳から全景を見てもらいながら「佐世保では初めての有料講演会ですから…」と半分も売れていないチケットのことを考えながら、空元気を出して何度も何度も念を押した。浜野さんは「頑張らないかんな～」とつぶやきながら熱心に佐世保を見てくれた。いい人だった。

そんなこんなで最後まで気が気でなかった講演会だったが、蓋を開けてみると入場者数は６６０名、通路にも人があふれる大盛況となった。ある市の職員は「なんかプロレスでも観るような講演会でした」と印象を語った。聴衆のまなざしは、大袈裟ではなく格闘技を観るそれのように熱気を帯びていた。佐世保が好きだ、何とかしたい、と熱く願う人が、本当はたくさんいる街だった。

始めの会合は、皆、佐世保の街への不満ばかり噴出。「ごみが汚い」「海が汚い」「町並みがごちゃごちゃしている」「名物がない」「歴史がない」「誇りがない」「所詮寄せ集めの町だから…」等々。しかし、２回・３回と会を重ねると不満も出尽くし、そろそろいいとこ探しでもしようじゃないかと空気が変わってきた。

「国際通りは悪くない」と誰かが言った。「そうだ悪くない」「あそこも好きだ」それぞれ好きな風景を自慢したい場所について語った。以来、会は佐世保の“いいとこ探し”“自慢さがし”の会になった。その中に赤煉瓦の魅力も発掘され、皆も意識が高まっていくことになる。

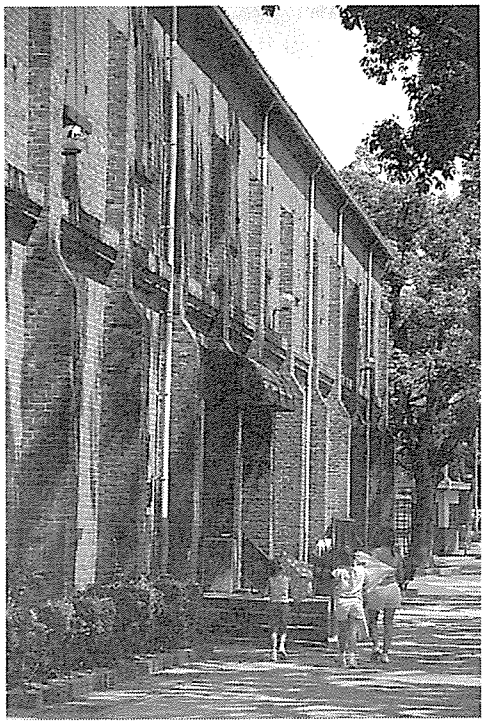
仕事をかかえ、残業続きの多い忙しいメンバーばかりだったから月一回だけの細々とした活動が続いた。

それでも佐世保の好きな所アンケート、タウンウオッチングなどイベントを重ねていく中、ある日会員の一人が「駅前再開発」の情報を持ってきた。その計画は港の開発・埋め立てなどに加え、高速道路が町と海を分断して通ることになっていた。さらにそれは市民の一番人気の国際通りの楠木並木の上をも切り裂いて行くことになっている。すわ！高速のことを考えないと！以来、活動は「高速道路」と「赤煉瓦」の２本柱がテーマになっていった。

赤煉瓦部会は後の「赤煉瓦探偵団」へと発展する。

活動のいくつかを紹介すると、平成５年９月、明治大正期に建てられた平瀬町の赤煉瓦倉庫群の取り壊しについて、大蔵省、佐世保市に意見書を提出し、その保存を呼びかけた。ある日、「国に意見書を出されましたね」と突然大蔵省の出先機関に呼び出しを受けた。ドキマギしているメンバーの前で担当者は「入札をして買い取ってもらう方法があります。入札は２週間後です。そして、落札したらすぐに移動してもらわ

米軍基地内の赤レンガ倉庫


米軍基地内の赤レンガ倉庫

なければなりません」と言う。当たり前だが、一介の市民に買い取るお金さえなければ、移動する方法を思いつく時間もなかった。

結果は、その願い空しく取り壊されてしまったが、その中の１棟分の煉瓦を「ごみ」として会員の地所に捨ててもらった。そしてメンバーのひとりが３年がかりで１個１個の煉瓦に再生した。その一部は佐世保市の歩行者案内看板の土台として新たに蘇った。

また、平成８年８月、舞鶴の赤煉瓦博物館に塊を運び「佐世保の赤煉瓦」として展示してもらった。

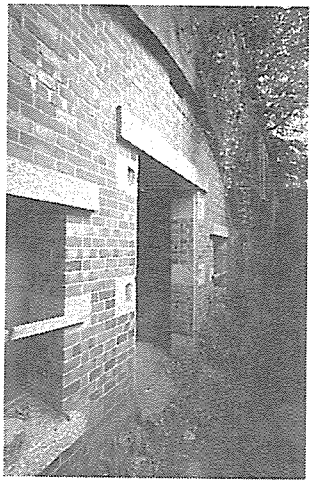
平成９年１月からは「全国赤煉瓦ネットワーク」という歴史的煉瓦建造物の保存・活用を含めたまちづくりを進めようとする市民や自治体職員グループの全国組織にも参加し全国的な交流活動が活発になっていく。平成１０年１月には舞鶴や横浜の赤煉瓦ネットワークのグループが訪れ、佐世保の赤煉瓦倉庫の集積に目を見張った。

私たちは、よその街の人々の賞賛の声に改めて勇気を得て、平成１１年にはネットワークの全国大会の佐世保での開催にこぎ着けた。遠くは北海道から南は鹿児島まで１００余名もの参加を得た。ゲストも東大の藤森照信教授をはじめ、そうそうたる顔ぶれになった。

佐世保の赤煉瓦倉庫群は米軍佐世保基地内にたくさんある。ここは、手入れ状態も保存状態も良好で整備マニュアルまで存在する。全国の仲間の最大の楽しみが米軍基地内の赤煉瓦倉庫群の視察であった。

しかし、８月上旬の事前調査の時には自由に出入りが許された基地も、９月１１日に発生したアメリカ同時テロによって、事態は急変し、基地の視察は一切拒否されてしまった。佐世保の赤煉瓦でのまちづくりには、世界情勢で揺れ動く「基地」という大きな問題も立ちふさがっている。

微力な会ではあるが「全国に誇れる赤煉瓦建造物の街　佐世保」をこれからも探求し続けたい。「継続は力なり」である。



砲台跡

黒島の教会

２００２年度は、させぼ塾の１００周年記念事業の一貫として赤煉瓦の写真集の発行が叶う事になった。

佐世保の高速道路

私たちが高速道路の詳細を知ったのは、もうすでに環境アセスメントも終了し、都市計画審議会等で審議されるころだった。

つたない技術で港や国際通りのシュミレーションを行った。高速を何とか地下化してほしい、という話を当時の国会議員であった現長崎県知事の金子原二郎氏の事務所にも何度も足を運んだ。金子さんもいろいろ調べていただいた。しかし、もうすでに時期が遅く、高速道路は建設へ向けて着々と進行していた。

高速道路ができたら県北の人々が佐世保へどんどんやってくる。福岡方面からも来やすくなる。という話をまだ信じている市民も大勢いる。きれいになるからいいじゃないという考え方もある。

しかし、この海と山に囲まれた狭い佐世保の街が高速道路で街と海が分断され、海からは佐世保のシンボルでもある三浦町の教会も見えなくなってしまう。また、同時に進められている JR の高架化もあり、何mもの桁下を眺めて暮らさなければならなくなる。太陽がさんさんと照る佐世保公園・国際通り楠木並木の上にも桁ができる、この高速道路を私たちの子供たちは喜んでくれるのだろうか。

高速道路の問題からもうひとつの市民グループ「したかねこがん町会議」も立ち上がった。佐世保市も都市デザイン担当の理事さんを招聘してくれた。

高速道路はできるが、少しでも圧迫感がないように、少しでも海が見えるように、国の予算もなくなっている中で創意工夫をこらした佐世保市の高速道路にしなければならない。

歴史がない、と言われてる佐世保市だが、平成１４年には市制１００周年の節目を迎えた。立派な歴史だ。

佐世保市は、全国に誇れる赤煉瓦建造物の宝庫である。２１世紀の市民に、歴史が残してくれた大切な地域の資産として保存・活用していくことによって新たな歴史のページが綴られる。また、デザインを改善した高速道路によって新たな景観が生まれるようにしたい。

赤煉瓦も認知度はまだまだ低いし、高速道路も今からが大切な時期であるが、一歩一歩地道な活動を続けていきたい。

ボランティアグループ「九十九島の会」の活動

遠藤　鉄郎
ENDO TETURO

「九十九島の会」会長

■西海国立公園九十九島の誕生

藤浦　洸

空いっぱいに
空があるように
海いっぱいに
海があるように
人よ
心いっぱいに
美しい心をもって
　この空を
　この海を
　この土を
愛そう

九州の西端長崎県の平戸諸島、その南の南北九十九島、東支那海に浮かぶ五島列島の一部が昭和３０年３月１６日西海国立公園として指定を受けた。佐世保に近い九十九島は大小２００の島が密集し、島の密度は我が国第一で、まことに美しい多島海の風景である。佐世保港外の九十九島の景観は、海軍という黒いベールに隠され、終戦とともに要塞地帯の制限が取りはらわれてからである。そのような中で昭和８年都市計画風致地区として、海軍の長崎要塞司令部と佐世保鎮守府の検閲、許可を受け、九十九島風致地区を指定して、九十九島の保全に取り組んできた。もし陸軍であったらいかがであったろうか？

■九十九島の数は「２０８」

西海国立公園九十九島？「せいかい」「つくもじま」「ハウステンボス」？「長崎市」場所も読み方も「さいかい」「くじゅうくしま」「佐世保市」と読んでもらえないこともあり、ＰＲ不足解消の一つとして、１９９９年を１００年に一度の「九十九島の年」９月１９日を「九十九島の日」と位置づけ、各種のイベントなどを実施。その一環として九十九島の数は一体幾つ、の疑問解消に取り組むこととなった。市は昭和２５年国立公園指定のための調査報告書から「約１７０」、県は昭和２８年国に提出した西海国立公園候補地基本調書から「２０５」、国は県の基本調書を受けて「２００余」と統一されておらず、県市とも図面にナンバーリングした資料が残っていないため、市が九十九島独自の「島」の定義がないと島を数えることができない。その調査を行政だけでなく市民にも呼びかけ平成１１年１１月「九十九島の数調査研究会」（４３名、家庭の主婦から、あらゆる面で経験豊富な人達が参加）を立ち上げ、月１回のペースで会を開催してきた。海は湖と違い「干潮」「満潮」「大潮」「小潮」とその潮位は常に変化しており、海水面が高い時は完全に分離しているのに、低くなると陸続きとなり、複数の島が一つになることもある。何をもって「島」とするかは、海水面の変化のどの地点を基準とするかがポイントとなる。

□島の定義

地形図や海図を使った検討、船での海上調査、ヘリコプターによる空からの調査など様々な調査研究の結果、平成１３年２月に九十九島における『島』の定義を決定。

○自然に形成された陸地であって、高潮時において水に囲まれ水面上にあるもの。

○植生（潮間帯より上に生える植物）が認められること。

市民と行政が一体となって導き出した島の定義は、多くの方々に納得をしていただき、この定義により島の数を数えることが可能となり、平成１３年４月１日に「九十九島の数は２０８」と発表。

因みにこの日は佐世保市制施行９９年の記念日であった。

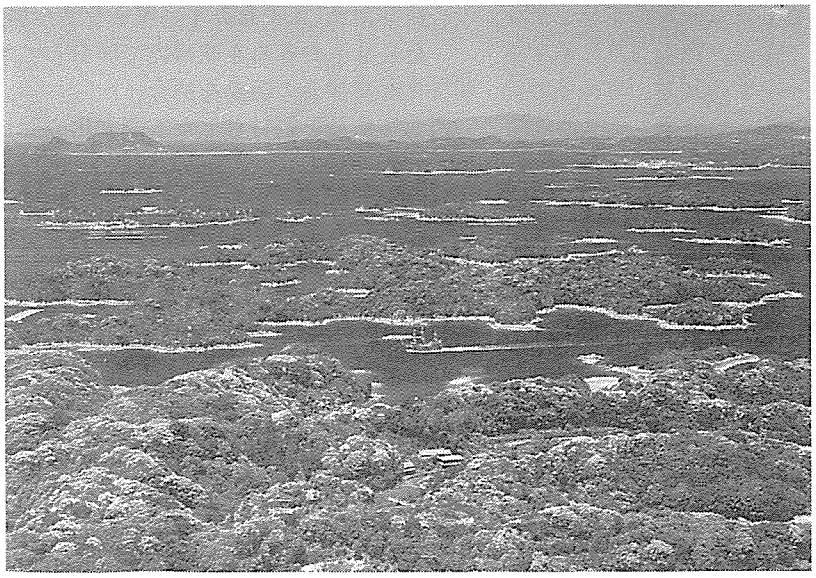
［蓮田尚（２００１）：西海国立公園「九十九島」ながさき経済１４２ 1-6］

■ボランティアグループ「九十九島の会」

平成１３年４月１日島の数２０８を発表し目的を達成したことから、研究会のメンバー２７名と新規加入２名顧問２名計３１名（現在３７名顧問２名計３９名）で平成１３年４月１９日「九十九島の会」が発足。

□会の目的

当会は、西海国立公園九十九島の特色である「海と島」の豊かな自然や生態系への理解を深めるとともに、自然保護の立場から、次の世代への継承を図り、更には佐世保市の観光振興に寄与することを目的として、これからも様々な活動に取り組んでいこう



西海国立公園　九十九島

とする団体である。発足後の２～３年間は、九十九島についての全般的な調査研究を行い、九十九島に関する知識を蓄えながら、当面の目標として数年のうちに、九十九島２０８島の台帳作成をと目指している。

□会の活動

都市公園は、法的に公園台帳を整備しているが、自然公園においては、独自に整備する。よって、２０８島のカルテ（戸籍）とも言える「島の台帳」を作成するため４部会と別に２部会、計６部会を設け、各部会が連携を保ちながら、活動を展開している。

１．島の名前と歴史部会

九十九島全島２０８のより詳しい実態調査を行う。それぞれの島の名称、歴史、土地所有区分、島の状況、植生、伊能忠敬の足跡、法規関係、島の沿革及び生態系など「各部会」の蓄積したデータを収集、調査結果に基づく台帳の整備を図る。

２．自然調査部会

特色のある島、海域、海岸線の動植物、魚介類、地形地質などの調査。保護を図る方策の研究。調査結果の整理。

３．写真等記録部会

写真、ビデオによるそれぞれの島の景観、動植物など各部会の活動の関連、会の催しなど撮影記録として保存。

４．芸術文化部会

九十九島にまつわる民話、絵画、詩、俳句、短歌などの掘り起こし。こどもを対象とした文化祭、俳句の会などを開催。文化面からの情報発信。

５．美化清掃部会

全員を対象に、利用の多い島、海岸線、陸域などの美化清掃。環境の保全に努める。

６．ボランティア部会

九十九島遊覧船「パールクイーン」（平成１４年７月２０日就航）のボランティアガイドとして乗船。九十九島に関する案内、ピクチャーサービス、車椅子の介助等を通じて来訪者と直接コミュニケーションを図る。

■会の資金

海を舞台とする活動で、陸の活動に比して費用が嵩むことから、１３～１４両年度は会の立ち上げ資金として、「市民文化の創生とその人材育成」を目的とする「佐世保塾」、「こだわり塾」の事業認定と「させぼパールシー（株）」から活動助成金の援助を受け活動を進めてきた。

□１３年度予算　752（単位千円）

歳入　させぼ塾433、させぼパールシー100、年会費 99（一人当たり 3）、事業参加負担金 50（船利用時一人当たり 500 円）、特別会費 70（会員の寄付）。

歳出　船舶借上料 231、運営費 191、事業費 330.

□１４年度予算　860（単位千円）

歳入　させぼ塾500、させぼパールシー100、年会費 99、事業参加負担金 65、特別会費 96。

歳出　船舶借上料 340、運営費 191、事業費 329。

■活動内容

□１３年度　発足後間もないため「会則の制定」という議論を通じて、会の理念や活動内容のあり方を長時間にわたり協議、学習を行い、それに基づき会を運営。

○市行政区域内１１１島のうち身近な南九十九島の一部７１島を調査。島の名称、伊能忠敬（６９歳）の足跡［南九十九島９９島（有名島７６、無名島２３）を１６日間測量（文化１０年・１８１３年１月４日～２月１０日）］、土地所有区分、法規関係など島の沿革を調査。

○特色のある島、海域、海岸線の動植物、魚介類の調査

○１１月１１日秋の九十九島収穫祭。

○１２月２６日～１月４日まで新佐世保駅開業記念「九十九島ミニギャラリー展」、会員２名の写真を駅構内で展示して九十九島及び会の活動を紹介。

○九十九島を題材とした芸術文化の掘り起こしとして、上小高島の歴史文化の調査。

九十九島の会　イベントでのＰＲ活動

「九十九島ミニギャラリー展」（会員）
新佐世保駅開業記念 コンコース

九十九島収穫祭に詩人藤浦洸の「空いっぱい」の原稿、碑文原文を展示。１０月１８日俳壇・佐世保同人九十九島クルージング吟行（１８０名参加）に協力。

○島の清掃活動　全員による清掃及び調査活動時に併せ清掃（６カ所）。

○白浜海浜公園に自生する「ハマボウ」の保護。準絶滅危惧種（長崎県・佐世保市指定）他に類のない大木で、市に保護を要請。市が保護の制札を建立。

○１１月１１日～２月１８日まで、ＪＲ特急「みどり」を「九十九島」に改称キャンペーン。九十九島の知名度向上、県北地域の観光振興に寄与することを目的として、８６５１名の署名を市及び議会に提出。市長・議長がＪＲ九州に実現方を要請。市制１００周年を契機に、市と一体となり努力する。

□１４年度

○市行政区域のうち、南北九十九島の一部４０島を調査中。

○本年４月１日に市花指定の「カノコユリ」について九十九島の分布状態を調査。

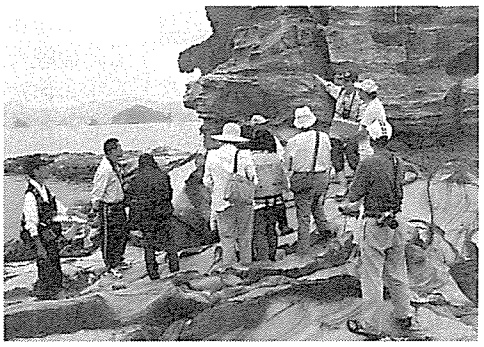
○７月２０日に就航した九十九島遊覧船「パールクイーン」にボランティアガイドとして２６名が登録、常時活動中。

○９月１４日九十九島子ども文化祭を開催。絵画、詩、俳句、短歌部門及び俳句教室に１６３名が参加。９月２９日遊覧船海王で表彰式を行い、１０月１日～１５日まで、入選作品７２点を市庁舎ロビーに展示。

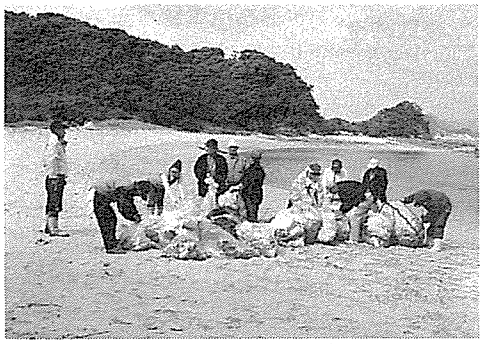
○１０月１７日「第２２回全国豊かな海づくり大会」その他「全国都市問題会議にボランティアガイドとして参加。さらに「シーサイドアジアンフェスタ」、「こどもエコクラブ全国フェスティバルインさせぼ」に九十九島の情報発信基地として参加。

■今後の活動

「させぼ塾」の支援活動が終了。次年度からは独自の資金での活動となり、ボランティアガイドを中心に２年間の実績をふまえ、会の目的に添って進む。

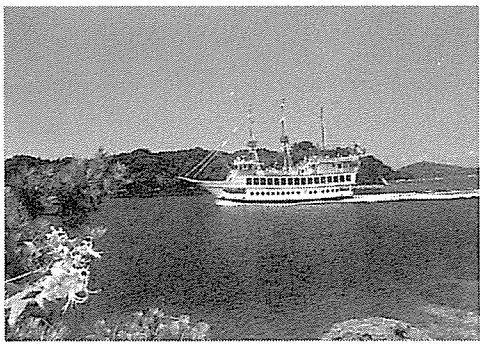


九十九島（長南風島）の地質調査



九十九島（金重島）の清掃活動

ＪＲ特急「九十九島」に改称　街頭署名活動



市花　カノコユリとパールクィーン
（ボランティアガイドで乗船）

九十九島子ども文化祭　スケッチ風景

特集 6

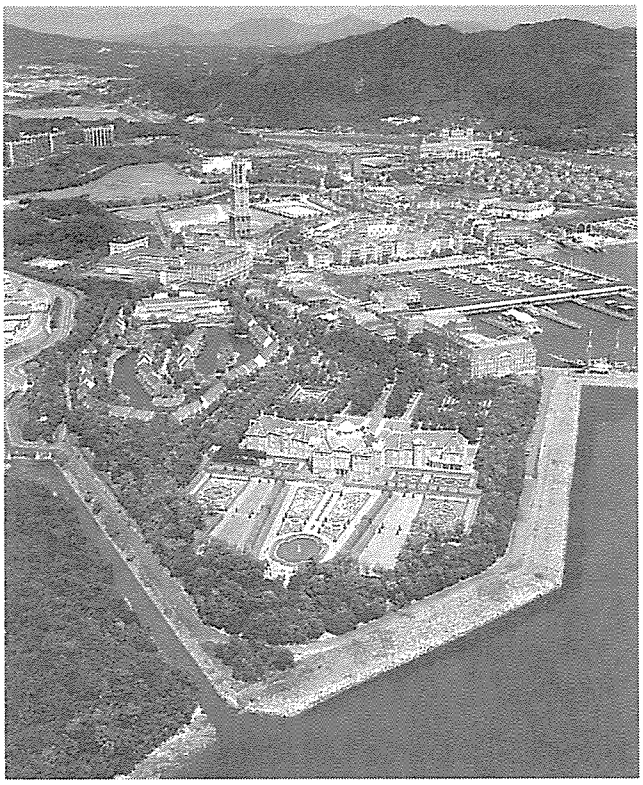
自然環境の息づく街 -ハウステンボス-

松田　裕二
MATUDA YUUZI

ハウステンボス株式会社
常務取締役

佐世保市の南部、風光明媚な大村湾に面した温暖な気候に恵まれた１５２万平方メートルの広大な用地にハウステンボスが誕生してから、１０年の年月が経ちました。荒廃していた土地に自然の息吹を取り戻し、人が住み、そして暮らしていくための最も大切な自然環境の生成と育成を目指したハウステンボスの開発理念は、今日まで、年ごとにその成果を表してきています。徹底した土壌改良の後、地域風土に合った樹種にて植えられた４０万本の樹木は繁り、森となり、真に『森の家ーハウステンボス』の名にふさわしくなってきました。年間四季を通じて、３０万本あるいは５０万本の花が、３００万人を超える人々の来訪を迎え、国内では始めての事例である６０００ｍの運河には、大村湾そのものより質の高い水環境が育成され、数多くの海水生物が白鳥をはじめ多くの鳥類とともに自然生態系の育成が見られます。

街における人間の社会生活活動に必要な都市インフラ（水、電気、熱エネルギー、情報など）は全て地中に埋没設置されていますが、堅実に維持されており、様々に取り組まれた環境技術の努力は大きな成果を上げています。自然の摂理を重んじ、「自然と闘うより調和する」と考えるオランダ人の哲学に学び、樹木や草木のもつ生命力、海の潮位差や、降雨などの自然天候のあり方等、自然の力を利用し、それに調和させることで環境づくりを目指した点が数多くの公的団体から評価されました。



１．水環境系

生活排水の水処理を３次処理から、UF膜を用いた除菌処理まで高度化させ、徹底した再利用をし、かつ大村湾及び周辺へ直接排水をゼロにしながら、自然石を積み重ねて造った水辺護岸をもつ運河施設をはじめ、美しい水環境を形成したことの評価に対し、＜環境庁＞より、１９９５年６月に《水環境賞》の表彰を受けました。また、潮汐利用による運河の水交換のしくみが１９９７年１月＜通産省財団法人省エネルギーセンター＞より評価され、《省エネルギーセンター会長賞》の受賞となりました。

そして、１９９７年７月には＜国土庁＞より、《水資源功績者賞》の表彰へと続きました。これは排水利用、海水淡水化・雨水利用による水資源の確保と水辺環境の創造などを合わせ、トータルな水環境保全に対し評価をいただいたものです。

２．環境の緑化

本年２００２年の７月には、１０年間における自然環境の保全、生態系の創造といった取り組みに対し、＜内閣府、農林水産省等８府省／緑化推進連絡会議＞より、《緑化推進運動功労者―内閣総理大臣表彰》を受けました。この用地はかつて、工業団地造成事業のために埋め立てたまま長年放置され、土壌は無機質化し樹木が一本も生えないような荒地と化してしまっていました。

土壌を徹底的に改良し、排水を施し、この気候環境に合うよう樹種、配置を良く研究し植樹した４０万本の緑の環境形成が高く評価されました。

３．環境リサイクルへの取り組み

ハウステンボス開業後すぐに研究を開始し、２年後より実践してきた「生ごみコンポスト処理」の取り組みに対して、１９９８年２月に＜通商産業省／財団法人省エネルギーセンター＞より、《通商産業省》を受賞しました。また、２００２年１０月には＜内閣府等８府省＞より、《リデュース・リユース・リサイクル推進協議会会長賞》を受賞しました。生ごみのコンポスト化、廃油のリサイクル、オフィス組のリサイクル等廃棄物処理全体の取り組みに対し評価していただきました。このような数々の評価は、社内組織である「ハウステンボス環境文化研究所」の地道な努力や社外の関係企業も参加しての「ハウステンボス環境研究会」の活動によるところであります。

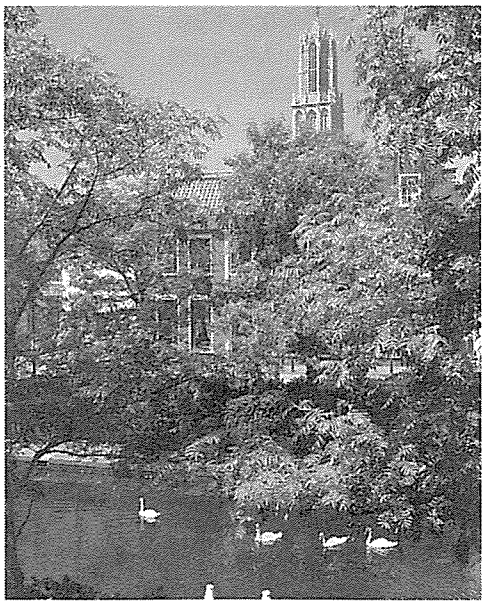
ハウステンボスは収益事業外のこうした環境づくりに対し多大な投資(約６００億円)をしています。その投資が、どのような価値を生み出しているのか、現在「環境会計」という新しい価値体系のあり方を研究しています。今後の有限な地球環境の中で、都市開発が環境問題に対しどのような方向を目指すべきか、あるいはどのような基準が求められているのか明らかにできれば、今後広く社会に展開することが可能と思われるのです。

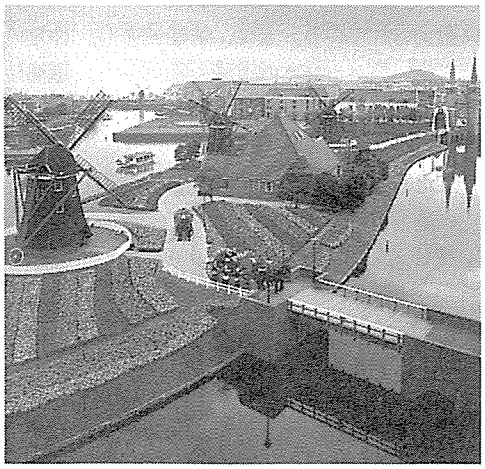
近年、ハウステンボスに「ハヤブサ」が飛来してきています。ハヤブサはワシやタカと共に食物連鎖の頂点に立つといわれています。食物連鎖は「食う―食われる」の関係です。底辺は樹木、草などの植物。その上が草食性の昆虫や小鳥などの小動物。そして、肉食性の動物へとピラミッドを構成しています。ハヤブサが生息するということは、その地域の生態系のピラミッドが完成していること、生態系のバランスの良い環境が生成されてきている結果だと思われます。

４．地域とハウステンボス

ハウステンボスの開業により、佐世保市は美しい九十九島を有する西海国立公園に加えて、全国的に注目を浴びる地域となりその経済効果は、日銀長崎支店により２５００億円を超えると発表されています。そうした経済面での効果だけでなく、ハウステンボスが継続させている環境面でのさまざまな取り組みが今後地域社会に拡がっていくことが期待されます。渇水状況に陥りやすい佐世保市としては、水資源の再利用計画や造水対策が必要です。また廃棄物の分別、再利用を含めたリサイクル計画も必要です。

生ゴミのコンポスト事業の地域展開も考えられます。都市インフラ設備の埋没を進めることにより、市街地景観は美しく整備されていきます。ハウステンボスにおける実験型環境開発の事例が生かされるのはそんな遠い日ではないと思われますし、今後の進展に大きな期待がかかっています。





特集　7

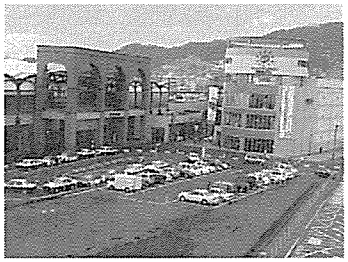
港とまちの一体化を図る
－開港以来の骨格を変える佐世保駅周辺再開発事業－

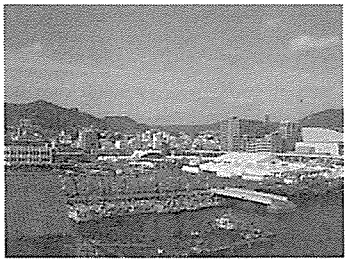
田中　英隆
TANAKA HIDETAKA

佐世保市企画調整部
企画調整課

旧海軍の技術力で構築された港
（○が駅周辺地区）

開発が進む駅周辺地区（H14 春）


今後整備される駅前広場（手前）


飛躍年広場（ﾎﾟｰﾄﾙﾈｯｻﾝｽ 21 計画）
（市制百周年記念事業ｲﾍﾞﾝﾄ状況）

はじめに

佐世保市が近代都市として生まれ変わったのは、明治２２年第３海軍区佐世保鎮守府が開庁（この時から開港）してからで、巨額の国費と優秀な海軍技師たちの技術の粋を集中して、軍港の建設と市街地の建設が始まった。昭和の初期には東洋一を誇る大軍港となり、佐世保の礎が出来上がったのである。

それから半世紀あまりを経て、佐世保駅周辺が今大きく様変わりしようとしている。「平成の大改造」と言ってしまえば当時の海軍技師たちに失礼であるが、西の果て、地方中核都市の玄関口２５ha に、１千億近い事業費を投入しての都市基盤整備プロジェクトが「佐世保駅周辺再開発事業（７大事業）」である。

今回は、新しい玄関口として、まちの骨格を見せはじめた駅周辺地区の現状を紹介しながら、これまでの事業プロセスを回顧してみたい。

「佐世保のまちが変貌した！」

最近、佐世保に来る県外の友人たちから良く聞くフレーズである。まちの玄関口が変わると、まち全体のイメージに与える影響は大きい。開発前は、「これが人口２４万人のまちの玄関口？？」と言われるのが定番であったが・・・。

今では、拠点となる新しいＪＲ高架駅も完成し、区画整理事業により駅から既成市街地側の面的整備や、土地利用も民間レベルで進んできている状況である。

高架駅のプラットホームに立つと、佐世保港がまじかに見え、その手前に広大な埋立地が広がる。ポートルネッサンス２１計画地である。昨年末まで、飛躍年広場として市制百周年記念事業が開催されていた場所でもある。

駅の港側にも出入口（みなと口）が新設され、タクシーバースや乗用車バースも暫定的に整備されている。また、鉄道高架の完成で港へ繋がる２本の道路も区画整理区域内に完成し、人や車の流れも徐々に港側へシフトしつつある。

海に開かれたまちの骨格が、長年の懸案であった「港とまちの一体化」を実現しようとしている。

国鉄の分割民営化が契機に

開発前を考えると、誰が現在の状況を予測できたであろうか・・・。

港とまちは線路により分断され、現在の区画整理区域は線路敷やコンテナヤードで占用され、市民にとっては閉ざされたエリアであった。

また、みなと側も水産市場や貨物ヤードによって水際線が占用され、防衛機能による制限区域を有する佐世保港内で、市民が親水空間を満喫できる場所など皆無の状態であった。

このように駅周辺地区は港とまちを分断し、市民生活とは無関係の都市空間でしかなかったのである。

この地区が一躍脚光を浴び、再開発の発端となったのは、「国鉄の分割民営化」に伴い発生した３.１ha の大規模遊休地の出現からである。

国・県・市のスクラム

当時、佐世保市は、基幹産業である造船業の斜陽化と、これに伴う関連産業の不振による中心市街地の活力低下に悩まされていた。活性化のカンフル剤を模索していたのである。

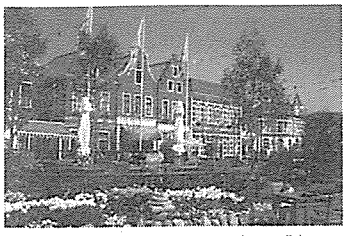
長崎県は、県北地域への影響を考え、佐世保市の活性化を重要な課題と認識していた。県と市で実施した中心市街地活性化計画（シェイプアップマイタウン）による「駅周辺整備の方向づけ」、県で実施した佐世保地区モデル定住圏構想調査による「佐世保道路の方向づけ」は、その最たるものである。

一方、国は、国鉄時代の赤字を遊休地の売却益で賄うため、時限立法により国鉄清算事業団を立上げ、その処理に躍起になっていた。その一つの方策が、定住拠点緊急整備事業（現在のまちづくり総合支援事業）による国鉄の遊休地を活用した新拠点整備である。

国・県・市の思惑が一致したためか、国鉄清算事業団や学識者の参画を得て、協議会が発足するのに時間はかからなかった。駅周辺地区における「大規模な遊休地の活用方策」や懸案事項であった「鉄道高架化事業」の手法についても方向性が見出され、大臣承認（旧建設省）をいただいたのは平成元年３月であった。

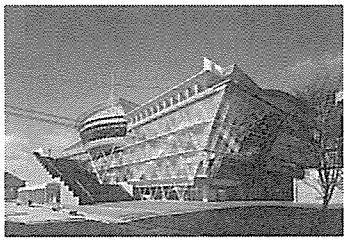
また、都市側の事業とは別に、旧運輸省メニューで進めていた港湾再開発事業「ポートルネッサンス２１計画」もその調査・計画を既に終えていた。

国・県・市のスクラムにより、佐世保駅周辺再開発事業の青写真が完成したのである。

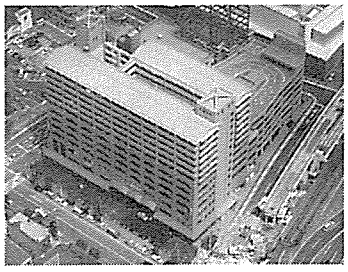


ハウステンボス(H4 年春開業)

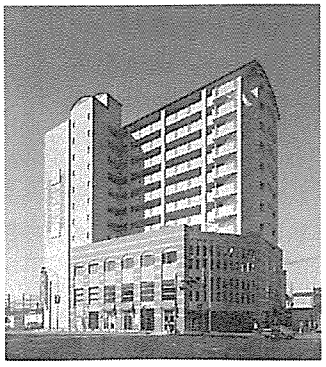
夕映えが美しい九十九島



アルカス SASEBO
(底地は買収した清算事業団用地)



アルファ(市街地再開発事業)



エス・プラザ(市街地再開発事業)

西海リゾート構想

再開発事業の青写真が完成しつつある時期に、ビッグニュースが飛び込んできた。佐世保市の南部に長期滞在型リゾート施設、ハウステンボス（日本語で「森の家」）の建設計画が持ち上がったのである。

オープンすると、年間４００万人にも及ぶ観光客が見込まれる。このうち１～２割でも市中心部へ呼び込みができれば、中心市街地の活性化、市全体の活性化に結びつけることができるのだ。

そこで、平成元年を観光元年と銘打ち、観光客を迎え入れるための３つの柱「海」「山」「まち」の整備を最重点課題として、「西海リゾート構想」を市の総合計画に位置づけたのである。

「海」は西海国立公園の玄関口、九十九島巡りの遊覧船が発着している鹿子前地区のリゾート開発、「山」が国見山系より連なり烏帽子岳の自然を生かした高原リゾート計画、そして「まち」の整備を受け持つのが「佐世保駅周辺再開発事業」である。

佐世保駅周辺再開発の７大事業

佐世保駅周辺開発の青写真に基づき、骨格となる事業を抽出すると、大きく７つの事業に分類される。

簡単に説明すると、

まち側の面的な整備を実施する「①佐世保駅周辺土地区画整理事業」、鉄道の立体交差事業である「②佐世保駅周辺鉄道高架化事業」、港湾再開発の「③佐世保港ポートルネッサンス２１計画事業」、県北の芸術文化鑑賞・文化創造活動の場としての「④アルカスＳＡＳＥＢＯ建設事業」、魅力ある市街地の形成を図るため、行政の支援事業である「⑤市街地再開発事業（潮見・戸尾地区）」、高規格幹線道路網を構成する「⑥西九州自動車道佐世保道路整備事業」、地域の主要幹線道路となる「⑦都市計画道路平瀬町千尽町線整備事業」・・・以上７事業である。

事業スタート

港側のポートルネッサンス２１計画地は、昭和６０年より先行整備に着手しており、上五島航路用の岸壁やターミナル整備は平成元年には完成している。一方まち側の区画整理事業も平成３年に事業認可を受けて、事業着手に入った。

７大事業が本格的な事業に着手したのは、これから６年後の平成９年、港側にあった水産市場の移転後となる。

佐世保市にとって、これまで経験したことがない大事業である。事業主体も国県市に跨っており、市の事業もセクションが多岐に亘っている。

７大事業を複合的に進めていく上で、大きな不安がよぎる時期でもあった。

推進体制はできたけど・・・

駅周辺再開発事業の総合調整が必要との主旨で、企画調整課内にその業務が割当てられたのは、平成９年に入ってからである。行政内部に庁内推進委員会を設置し、案件処理や方向づけを行ってきた。

しかしながら、７大事業が縦割りの構図の中で実施されるのを、打破できるものではなかった。

駅周辺全体を一つのまちとして、「都市空間」「生活空間」の場として考えるには、横の事業連携が必要だ！駅周辺再開発事業に携わり、駅周辺地区を真剣に考えている実務者の共通の認識であった。

プロセス重視へ

ひとつの転換期は、それから２年後の平成１１年４月、佐世保市理事「都市デザイン担当」として西脇理事が招聘された時である。

理事は、横浜市のまちづくりに深く関わられたこともあり、駅周辺の問題点もすぐに掌握された。

都市デザインの視点で、再開発の青写真の見直しに入る。市事業はもとより、国県事業についても然りである。

事業セクションとの調整は昼夜関わらず何度となく行い、国県へ出向いての協議も回数を重ねた。

様々な議論を交わした成果として、事業セクションでもまちづくりへの意識が高まり、共通認識が芽生えた。

「全体のまちづくりについて、各事業者が共通認識を持ち、事業を遂行する・・・そのプロセスが大事だ！」

・・・現在の所感である。

こころやさしい海辺のまちへ

美しい緑と水に彩られた港の香り、人々の交流と文化が映える新しいまちづくり・・・駅周辺再開発のまちづくりテーマである。これから、本格的な土地利用が行われ、本当の意味でのまちづくりは始まったばかりである。

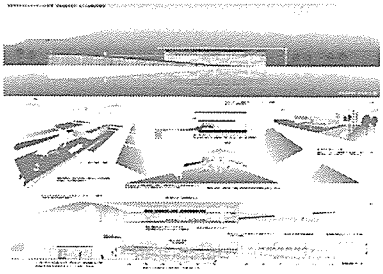
特集 8

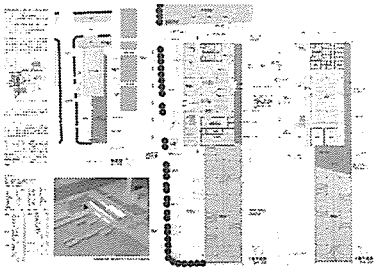
街づくりを開かれたプロセスで
－近海航路旅客ターミナル公開設計コンペを終えて－

杉本　和孝
SUGIMOTO KAZUTAKA

佐世保市港湾部計画課

最優秀賞の北川原温案





PJ 会議の様子

はじめに

海軍鎮守府設置を契機とした都市の誕生から、佐世保は港とともに発展し、海と山々の自然の豊かさに育まれながら、平成１４年、市制百周年を迎えた。

佐世保港は、リアス式海岸の美しい入江の形が、葉っぱを広げたように見えることから、葉港とも呼ばれている。その湾奥の佐世保駅に近接する埋立地では、軍港という性格から、これまで街や市民と隔たりがあった港を、“潤いと賑わいの水辺空間”に再生するために、ポートルネッサンス２１計画が進行中である。

周囲を山々で取り囲まれ、個性的な都市景観を有するこのエリアは、佐世保駅やバスターミナルとも近く、五島列島や沿岸地域へ向けて年間約８０万人が利用する海の玄関口となっている。

現在埋立地では、平成１７年の街開きに向けて、着々と基盤整備が進んでおり、新たな佐世保の顔が誕生しつつある。

近海航路ターミナルは、この中の唯一の公共建築物であり、市では初めてとなる公開設計コンペから、約２年が過ぎた平成１５年の新春、最優秀賞を受賞した北川原温氏の設計案が、埋立を終えたウォーターフロント空間に、建築第一号として槌音を立て始めた。

何故、公開設計コンペなのか

一般に市民が新しい公共施設の建設を知るのはどの時点だろう？一部の市民を除いては、工事着工の新聞記事、建築現場近くをたまたま通りかかってというケースは早い方で、完成した後でも利用するまで知らなかったという人さえいる。

本来、公共施設は市民のものである。しかし、その計画から実施に至るプロセスは市民にとって、とても判りにくい。

『設計者の選定を従来の入札方式ではなく公開コンペで選ぼう！優れた設計案はきっと後に続く民間施設をリードし、市民も設計段階から計画に注目してくれるはずだ』

そんな思い付きが大変な事態となった。

まずは、行政内部の理解を得るのが大変だった。公開コンペは市としては初めての経験であり、また多くの予算も無い。時間と手間がかかるコンペが何故必要なのか？プロポーザルや指名コンペではだめか？第一こんな地方都市の、そんなに大規模でも複雑でもない施設のコンペに参加する建築家がいるのか？そんな議論が繰り返された。

公開コンペの主眼は次の３点にある。

- 建築家と市民、２つの“公開”と開かれたプロセス
- 建築家の英知と港のまちづくりをリードする優れた設計案の選定
- 佐世保みなとづくりの全国発信

こうした目的を掲げた公開設計コンペは、幸い理解し協力してくれる仲間や上司に恵まれ、市長の英断によりスタートすることになった。

実施に対するポリシー

コンペの運営には、営繕や企画調整、まちづくりなど様々な部署の応援が不可欠となる。まずは庁内のプロジェクトチーム「PJ 会議」を発足した。

他の部署の業務の手伝いに喜んで来てくれるような暇な職員はいないものだが、参加してくれた職員は、初めてのコンペ実施に誰もが活き活きとしていた。

作業を進める中で、ひとつのポリシーがみんなにあった。

『アカウンタビリティーが求められる時代だからこそ、フェアで最大限透明性を確保したコンペにしよう！』

今回のコンペに携わったスタッフが、いつも持ち続けた姿勢だ。

実施することが決まったら必ず成功させたい。みんなに喜んでもらえるコンペにしたい。そんな思いを秘めながら、コアスタッフはとんでもない忙しさに突入していった。

プロセス公開のオープンコンペ

公開設計コンペの「公開」には二つの意味がある。資格を有する全国の建築家への公開公募と、市民や参加者への情報公開である。

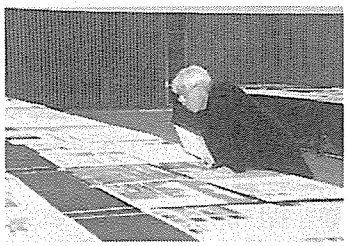
設計条件を詰めるために、まずは、利用者の声を聞くことから始めた。第一便の船が出る朝早い時間から、桟橋に立ってアンケートをお願いし、２日間で５００人以上の回答を得た。

航路の実体験も重要である。実際船に乗って航路先の島の様子や生活をスタッフと体験しながら、応募要項の打ち合わせを何度も繰り返した。

審査委員を誰にお願いするか。これは今回のコンペのイメージと参加者の意欲を決める重要な要素である。

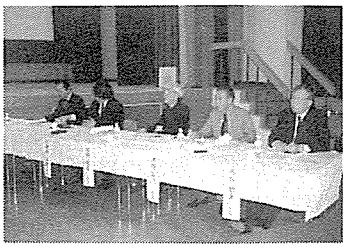
そして見識と信頼の高い建築家の先生方などに審査委員就任のお願いに伺った。

第一次審査の様子



市民講評

第二次審査



審査経過や応募作品をまとめた競技記録の在庫が多少あります。ご希望の方はご連絡いただければ送付します。詳しくは http://www.city.sasebo.nagasaki.jp/kouwan/kiroku2 をご覧下さい。

「中途半端なコンペなら協力しない。競技のための資金不足、コンペ案から基本設計の区切りが曖昧である」など指摘を受けた。２時間以上におよぶ交渉で、ようやく市の気持ちを判ってもらえた。それくらい委員の先生方も真剣だった。

そして、審査委員長に建築家・早稲田大学名誉教授の池原義郎先生。

審査委員に建築家・芝浦工業大学教授の三井所清典先生。福岡大学教授の吉田信夫先生。利用者として佐世保旅客船協会会長の木原弘治氏、そして主催者側として佐世保市理事の西脇敏夫の５名による審査委員会が組織された。

情報発信の手段としては、建築雑誌のほか、インターネットのホームページを活用した。専門業者にページ製作を委託していては、時間がかかってリアルタイムな情報発信が出来ない。それなら自分達で作ってしまおう。市の公式ホームページの運用に先駆けて、港湾部独自のページを開設した。

応募要項の公開開始。インターネットでの資料請求も功を奏したのか、当初の予定を遥かに超える１２００件の問合せと、うち７５０件の応募登録があった。

計画地の状況をじっくり見てもらいたいと「YOSAKOI させぼ祭り」の当日に開催した現地説明会。夜の街では全国の建築家と市民の交流も行われたようだ。

６５９件の質疑の回答書作り、ホームページの更新、目まぐるしく時は過ぎて、作品締め切りの日には、全国、そして海外在住者から、登録者の６０％にも当たる４５４点もの力作が集まった。

締め切りに間に合わせようと、飛行機に駆け込んで来た建築家。鹿児島から車を飛ばしてきた学生など、締切間際まで作品を持ち込む参加者の顔には、疲れを忘れた清々しさがあった。

審査委員泣かせの過酷な審査

審査は公正を期す為、登録番号とは別の作品番号を用いて進行した。

《第一次審査》市内で一番大きな体育館のフロアいっぱいに広げられた全作品。２階席から応募者や市民が見守る中、１日目５７作品に絞り込み、２日目佳作５作品、優秀５作品の選定を行った。途中、池原委員長の提案により、無投票だった２８０作品を審査委員全員で再確認するなど、丁寧で慎重な審査が行われた。

《市民講評》優秀作品は第二次審査までの間、市役所や既存のターミナルのロビーに展示して、使いやすい施設となっているか、デザインはどうかなどいくつかの視点でアンケートや自由意見を募り、最終審査の参考にした。

《第２次審査》市民や職員が見守る会場での公開ヒアリング。設計者のプレゼンテーションの後、質疑応答。設計の細部にわたって直接設計者の声を聞いた。

《最終審査》対照的な２案が残り、最後まで優劣を決めかねた。個性的な外観と造船技術の活用。佐世保ならではの建築を追及した岡部案。文書での再確認。しかし、機能性、空間性などにおける現実の求めを満たしきれず、実施に踏み切れないと判断された。

おわりに

審査の準備を始めた頃から、頭の隅に掲げだした心配ごとがあった。

当初の予想を上回る多くの作品。参加していただいた建築家や協力者の方々が費やした膨大なエネルギー。これらに自分たちはどう応えていけばいいのか…。

表彰式の日、優秀賞のひとつに選ばれたアトリエを主宰する設計者の方が言われた。「提案の機会を与えられる事、そこに入選作として残る事、これらは組織を持たない地方の事務所にとって、大きな勇気を与えるものでした」

その言葉に、少し心が救われた気がした。

コンペ終了後、登録者全員に送付した作品集のお礼状にこんなものがあった。

『夫、志半ばにて 11/25 大動脈瘤破裂にて他界しました。前日まで楽しそうに「次々と案が沸いてくる」と話していたのが忘れられません。彼は生涯建築を愛し創り楽しく喜び幸せでした』と。様々な想いが込められたコンペとなった。

『佐世保の地形、海には優しさがある。優しいスケール感と微妙な変化を感じる。この案には、優しい山々と海と樹々と丘に交差する光のゆらぎを想像させる。』

北川原案に対する池原審査委員長の審査講評の一文である。

これから私たちは、最優秀案の素晴らしい提案を、建築物として実現していくだけでなく、佐世保のまちづくりの中で、どのように生かし、使い込んでいくかという課題に、果敢に取り組んでいかなければならない。

市民にとって誇りに思える葉港としていくためにも･･･。

特集 9

佐世保の都市景観について

久保田　日出美
KUBOTA HIDEMI

佐世保市都市整備部
まちづくり課

《佐世保の地形》

佐世保市は、海と島と山の街で、西側を海に面し、背後に連続する小高い山と、その間にわずかな平地があるといった地形の街である。海は、それぞれに特徴があって、東シナ海につながり多くの島が浮かぶ海と、周りを山に囲まれた天然の良港である佐世保湾、そして長崎県の中央に位置する穏やかな大村湾がある。島は、西海国立公園の一部である九十九島で、大小２０８の島からなっている。山は、海からのびる稜線がそのまま尾根につながる形となっており、市域のほとんどが山といっても過言ではない。市域を囲む山を源とする河川に沿って山間部の斜面地には棚田、河口周辺の平地には一部田園が広がり、農家が点在している。佐世保の中心市街地は、港を取り囲む斜面地を旧海軍や海軍工廠等の関係者が住宅地として利用し、河口のわずかな平地と埋立地に商店街や歓楽街が形成されて発展し、形づけられてきたものである。また、湾の奥まったところに、明治の海軍鎮守府設置以後、軍港として整備された岸壁やドックなどが今もその形態をとどめている。

《佐世保の都市景観》

佐世保は、豊かな緑と海の自然、ダイナミックな眺望、港の歴史など、すぐれた景観資源をもっている。西に広がる海と島々、緑の山並み、海岸線、この美しい自然は、遠景のシルエットを構成し佐世保の特徴的な背景となっている。また、軍港として出発した近代都市の歴史は、港周辺の赤煉瓦倉庫群を始めとして、市内随所にその象徴とも言える歴史的なポイント景観を残している。一方地域においては、昔ながらの街並みがその名残をとどめており、地域の個性的な景観をつくっている。また、近年では、リゾート施設のハウステンボスが洋建築の美しい街並み景観を見せている。佐世保市の大部分を占める自然景観、佐世保湾奥の港を中心に形成された景観、地域に根ざした景観、これが佐世保の都市景観である。近年これにハウステンボスが加わっている。

しかし、昭和３０年代からの都市化の進展は、佐世保の景観を少しずつ変えてきた。車社会の到来により、郊外の山を削った宅地開発が進み、道路沿いには店舗が立地し広告物が立ち並らんでいる。店舗には、原色が使われ、住宅も原色を使ったものが出て来ており、落ち着いたまとまりのある景観が、そこだけ異質なものとなってきている。斜面地には、住宅が階段状に建ち並び斜面景観が形づくられており、港への眺望が大きな特徴のひとつであるが、近年高層マンション等の建設により視界が遮られ、山～斜面地～港へと流れるような斜面景観に、環境の変化を感じるようになっている。歴史ある地域の街並みも、配慮のない現代建築物によってその魅力をなくしつつある。

《景観に対する意識》

都市景観が、市民の都市活動の結果として形づけられるものであるというのは、当然のことであるが、現実的にそれを認識している人は一握りではないかと感じる。街の景観を魅力あるものにすることに異論を唱える人はいないと思うが、個々の都市活動を景観と結びつけて考えるまでにはいたっていないように感じる。建物としてのデザインには十分配慮しているものの、背景を含めたまわりとの関係には配慮されていないものや、極端なところでは、経済の論理に根ざした形態、色彩が最優先で、景観を考えることが都市活動の障害であるような考えに出合うこともある。これは、都市景観を魅力のあるものにすることによって、何が得られるのか、個々にどう反映されるのかがわからないといったことから生まれてくると思われる。景観に対する配慮が実質的な効果として直接的、短期的に跳ね返ってくるのであればわかると思われるが、ゆとりや潤い感といった内面的なことでは、理解を得るのは非常に難しい。しかし、これが街の魅力を創るものであり、これまでの街づくりの中で、意識が薄かった“人（心）”をしっかりとらえることが、誇りと愛着のある街につながっていくものと思う。それを具体的にわかるようにすることが、最大の課題であると思う。

《都市景観形成の取り組み》

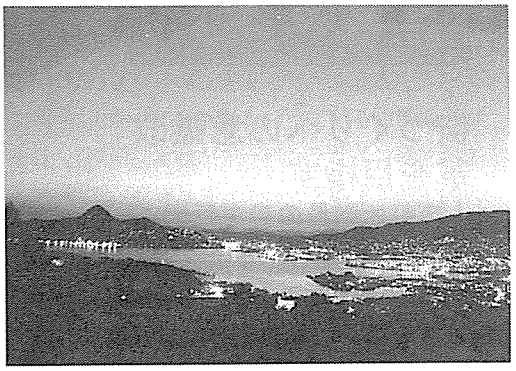
佐世保市は、心やさしい海辺のまちを目指し官民協働による景観形成に取り組んでいくとして都市景観要綱を制定している。佐世保駅周辺地区は、佐世保の玄関口であることから、要綱による景観形成地区に指定し、佐世保らしさを感じられる景観の創出を目指している。地区の特徴として、駅のすぐ眼前に港が広がって開放感あふれるところであることから、これを活かしていくことを考えているが、駅の遊休地の活用と港の埋め立てにより新しく創る街であり、もともと街としてのイメージが薄いことから、目立つ色彩の建築物や屋外広告物の掲出などの意向が強い。地区の景観目標に沿って誘導を図っているが、個々としての建物デザインに固執しがちで、背景やまわりとの関係、地区としての景観の方向性に対

して理解を得るまでにかなりの労力を費やすこともある。建築物を建てるのは、個人の自由であるが、それが建ってしまえば、好むと好まざるとにかかわらず、周りに影響を与えるものであり、それは個としてのデザインにとどまらず、全体を構成する景観の一部となる。言わば、公共的空間としてとらえる意識を持つことが重要である。景観という言葉が佐世保でも日常的に使われてきているが、魅力ある景観を形成していくには、個々の景観に対する意識が必要である。

１４年１０月、佐世保を代表する景観として「させぼ三景」を決定した。これは、市民に佐世保の景観を再発見してもらおうとして行ったものである。せっかくの機会なので紹介させてもらうと、佐世保市のほぼ中央、佐世保湾を取り囲む街と山々が一体となって形成する佐世保らしさを感じさせる景観の『港・まち・佐世保』、波静かな西海の海に大小２０８の緑の島々が寄り集まって見せる穏やかな自然景観の『九十九島』、自然と調和しながら環境に配慮し水と緑と花による演出も美しい街並み景観の『ハウステンボス』、以上の三つの景観である。これは、佐世保の根本的な景観を構成する、山、海、島、港と街をとらえているものであり、佐世保の景観形成の柱として、市民意識を醸成するものとして、又、佐世保のすばらしい景観を全国にＰＲすることを考えている。

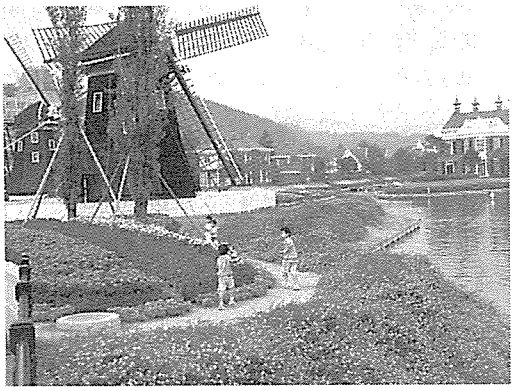
佐世保の都市景観は、大部分を占める自然景観と街との関係をどう考えるのかが最大のテーマであると思う。市内のどこにいても山がそこに見えており、海も港も身近に見える。

この圧倒的な自然景観と市街地の景観との調和を図ることが、佐世保らしい景観形成につながってくると思われる。景観は、意識を持つか、持たないかで良くも悪くもなる。一度壊してしまうと元に戻すだけでも長い時間がかかってしまうし、場合によっては、二度ともとに戻らないことがある。必要なものは壊さないようにすることが、重要となってくる。その為には、何が必要かということに意識を持つこと。これが佐世保らしい景観を育て、創ることにつながる思う。そういう意識を持って、魅力ある佐世保の景観形成に取り組みたい。



させぼ三景 ①『港・まち・佐世保』

させぼ三景 ②『九十九島』



させぼ三景 ③『ハウステンボス』

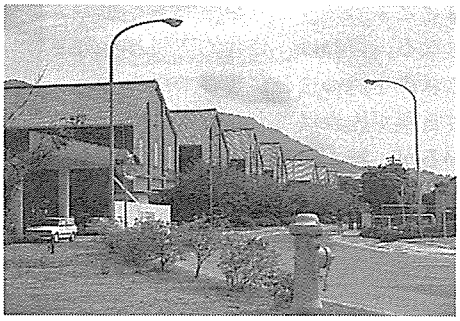
特集　10

街づくりへの意識改革を目指す
ー市役所職員の自主活動

畑　広一
HATA KOUITI

させぼアーバンデザイン研究会
佐世保市企画調整部
企画調整課

『わ～すごか～。赤煉瓦倉庫、楠の大木、潮風、金髪の美女・・・、こがんとこ佐世保にもあったとね～』(平成９年初夏のある日ー米海軍佐世保基地にて)



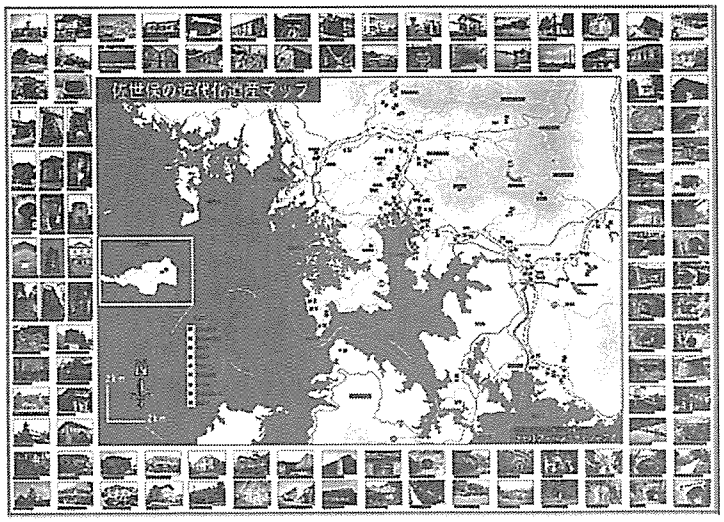
日本屈指の赤煉瓦倉庫群
平瀬町米海軍基地内（旧軍需部倉庫）

「市民みんなが誇りと愛着をもつまちづくり」、子供たちに自信を持って受け継いでいけるまちとは？をテーマに、させぼアーバンデザイン研究会は活動を開始した。

させぼのまちづくりに色々な形で携わる市役所の仲間のなかで、５名で発足した本会も今では１７名。土木技術職１１名、建築技術職４名、造園技術職２名の構成である。

結成当初は、何からスタートして良いものやら皆目見当もつかず、議論の連続であったが、とにかく何か行動を起こすべしとの結論から、佐世保の宝さがし（近代化遺産調査）にそのきっかけを見出すことにした。

近代佐世保の誕生は、海軍鎮守府が開庁した明治２２年に始まり、軍港の規模拡大と設備の充実により佐世保の歴史はつくられてきた。しかし、その歴史が今なお受け継がれ生かされていることは一部の人のみ知り得て、また知っていても特別気にも止めない状況にある。



佐世保の近代化遺産マップ

時として、佐世保は歴史のない街という言葉を耳にする。我々は、古臭い遺物として誰も評価しなかった物を含め、これらの物を掘り起こし、佐世保の貴重な財産・遺産として認知できるようにしたいと思っている。

平成９年度、調査の手始めとして、米海軍基地・水源地・砲台跡・自衛隊施設などの施設を見学し、その成果として、近代化遺産マップを作成した。

赤煉瓦倉庫群前にて

海軍鎮守府開庁当時の明治２０年代頃から明治後期、大正、昭和初期と歴史を刻んだ施設がまだ現役で活躍している。

平成１０年度は、近代佐世保の歴史を、一部の人のみではなく、多くの人に知って頂きたいということから、平成９年度に調査した内容を元に、ホームページを作成した。(http://member.nifty.ne.jp/urbanken/)一度はご覧になって頂きたい。今後もホームページのバージョンアップを図り、より多くの人に、当地「佐世保」の情報発信をしていきたいと考えている。

平成１１年４月、佐世保市では、横浜市で都市デザインを実践されてきた西脇敏夫氏を佐世保市理事（都市デザイン担当）としてお迎えした。この機会を逃すまいと、我がアーバンデザイン研究会でも早速、西脇理事を顧問としてお迎えし、横浜のまちづくり手法などを学びながら、佐世保のまちづくりについて考えていくための「都市デザイン講座」を開設した。

講座開設当初は、「馬車道やイセザキモールなどの商店街の再生」や「山下公園周辺地区」など、特に横浜の実践例を中心に、スライドを交えて紹介して頂いた。最近では、日常の業務など身近な話題を中心に意見交換を行い、都市デザインの考え方を学んでいるところである。

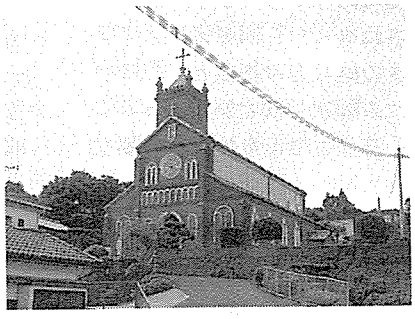
平成１１年度はまた、ＪＲ早岐駅の煉瓦造りの給水塔や転車台、真珠湾攻撃の「ニイタカヤマノボレ」の発信で有名な針尾の無線塔など、平成９年度以来途絶えていた

近代遺産調査を再開し、さらに、１１月には、「土木の日」にちなんで「日本近代化遺産写真展」を開催した。「東京駅」や「兵庫県の余部鉄橋」など、全国各地に残る、近代構造物の写真を展示し、約３５０名の見学があっている。

またこの年、市のまちづくり課主催で４回目を迎えるタウンウォッチング「早岐んまちタウンウォッチング」に参加し、宿場町が色濃く残るまちを再認識した有意義な一日であった。

平成１２年度は、冒頭より会報「夢のつづき－ふるさと近代化遺産紀行」の執筆依頼を受け、１０回の連載分をテーマごとに役割を決めて執筆に当った。連載文の中では、佐世保の近代化遺産の紹介はもちろんのこと、遺産に対する我がアーバンデザイン研究会の思いを綴っている。これもホームページに掲載しているのでご覧になって頂ければと思う。

また、引き続き近代化遺産調査として、「黒島教会」の調査を行った。１９０２年完成の教会で、平成１０年には国の重要文化財に指定されている。最近では、長崎総合科学大学の林先生が中心となって、長崎県内の歴史ある教会群を世界遺産にしようと動かれているようだ。



国の重要文化財　黒島教会

さらに「近代化遺産巡りバスツアー」や「相浦地区まちなみタウンウォッチング・相浦地区まちづくりシンポジウム」にも参加・協力を行った。

まちなみタウンウォッチング

平成１３年１０月には、佐世保市制百周年のプレイベントとして、赤煉瓦をテーマにまちづくり活動を行っている佐世保赤煉瓦探偵団と我がアーバンデザイン研究会主催で、赤煉瓦ネットワーク第１１回全国大会「赤煉瓦フェスタ　ＩＮ 佐世保」を開催した。赤煉瓦フリークの方々が全国より多数参加され盛況であったが、参加者の方々のオタクぶりに驚嘆させられるとともに、まちを愛する気持ちの強さに感銘を受ける出来事であった。

これまで年度毎の活動を時系列的に紹介してきた。「佐世保の宝さがし」ということで歴史面からアプローチを始め、また、まちなみタウンウォッチングや西脇理事による都市デザイン講座を通じて、多少なりとも街づくりの考え方が理解できてきたと思うし、メンバー全員の意識も変わってきたと感じている。

行政にはまだ都市デザインに関する意識もなく、業務としても確立されていない中で、我々アーバンデザイン研究会は、手探りの状況ではあるが、自らの意志で街づくりを実践してきたと思っている。

しかし、アーバンデザイン研究会だけが認識しても意味がない。我々は、今まで学んできた都市デザインの考え方を日常の業務の中で、色々な人たちと関係しながら広く伝えていかなければならないと思っている。些細なことでも、気長に継続的に実践していく努力をしなければならないと考えている。

させぼアーバンデザイン研究会も結成から６年が経過しようとしている。今までは、歴史面のみ追求してきた感があるが、今後は、まちをつくるその他の要素、例えば自然や都市、文化など、まちを構成する様々な要素を調査研究し、地域ごとのまちをデザインしていきたいと思っている。その過程においては、国内に限らず、諸外国の先進事例も調査したいと思うし、また、市民協働によるまちづくりについても調査研究していきたいと考えている。

させぼアーバンデザイン研究会は、今後も引き続き、「次世代に自信をもって受け継いでいけるまち」の創造を目指し、活動の輪を広げていきたいと考えている。

■研修研究委員会報告

松本　篤
MATSUMOTO ATSUSHI
アトリエ HOR

■研修・研究委員会主催　押しかけリレーセミナー　第２回
面出薫先生（照明デザイン）報告

研修・研究委員会では、小人数の参加による連続形式の「押しかけリレーセミナー」を進めています。これは、準会員、学生会員を含む会員や会員推薦の若手を対象としたもので、都市環境デザインのさまざまな分野の事務所をめぐり、経験豊富な事務所主催者のお話を伺うというものです。
その第2回が先日（平成15年2月12日）、照明デザインの分野で活躍される面出薫先生を囲み、17名の参加者を得てライティング・プランナーズ・アソシエイツ（LPA）で開催されました。若い参加者が多いことから、会の前半は、面出先生のこれまでの歩みや、その中で培ってこられた照明デザインの理念を、展覧会用のビデオや作品集などで示されることからスタートしました。照明デザインは時間の流れを光で視覚化することであり、そのために細かな場の連続を紙芝居のようにデザインしていく事、輝くべきものは器具ではなく人と建築であること、そして空間の機能に即したエコロジカルなデザインを進めるためにも自然の中に学ぶことの大切さ、などを述べられました。
その後パワーポイントを使いて、実際の作品ではそうした考え方がどのように展開していくかを示されました。仙台メディアテークでは明るさの感じ方の指標としての色温度の重要性、京都駅では北側のアトリウムを気持ちよく感じさせるために不必要なところに光を与えない、陰影のデザイン手法の実際を示されました。それがこれまでの交通施設での照明設計の考え方とどれほど異なったものであり、結果として大きなエネルギー消費の削減を果たしたことの説明もありました。LPA設立直後から取りかかられた東京フォーラムでは、鉛直面を明るくすることなど、〈適光適所〉で安全性と快適性を与えるアンビエントライティングの説明、現在進行中の六本木ヒルズでは多くの照明デザイナーとのコラボレーションのためのコンセプト作りについて、海外での事例としてシンガポールでZ. ハディドと進められている都市計画を取り上げ、光のマスタープラン、「進化する夜景」という、照明設計の都市デザインへの展開を示されました。

その後、実際の設計作業を事務所フロアで見学した後、軽い飲食を添えての意見交換会に続きました。ここでも、空間にあふれる過食症気味の光の今後や中国など海外の事情、建築と都市での照明設計の関わり方の違いなど、日頃なかなか伺えない実務のエピソードなどを交えながら、予定時間を超えての活発な質疑が続きました。将来の仕事や研究を模索する多くの若い参加者にとって、刺激的で貴重な体験となるセミナーでした。
研修・研究委員会では、引き続きGKグループのデザインを伺う第3回（平成15年4月ころ）をはじめ多彩な講師による「押しかけリレーセミナー」を予定しております。会員の紹介による方も参加できますのでぜひ積極的にこのユニークなセミナーをご活用ください。

ブロック例会レポート

■関東ブロック

須永　俶子
SUNAGA YOSHIKO
関東ブロック幹事

㈱ＴＡＬＯ都市企画

■関東ブロック・野田大会のご案内

シリーズ「関東における近代産業の発展と盛衰、その遺構の現状と都市デザイン」

第２回　水辺の産業と運河・千葉県野田市

これまで見てきた深川（小名木川）、隅田川、佐原（利根川）、栃木（巴波川）などの都市と水辺の風景と、新シリーズである「関東における近代産業の発展の盛衰」を絡め、利根運河を訪ねます。利根運河の過去と現在を見据え、将来像はどうあるべきかを考えます。

日　時：５月１７日（土）14時～17時
場　所：東京理科大　野田キャンパス
内　容：13:30時開演（13:00開場）

第１部　基調講演（13:40～14:40）
山本鉱太郎「江戸川、利根川、そして利根運河の歴史的風景」
第２部：パネルディスカッション（15:00～16:30）
テーマ　『利根運河の可能性を考える』
コーディネーター：
加藤源氏（㈱日本都市総合研究所代表）
パネリスト：
山本鉱太郎氏（旅行作家・劇作家）
庄司邦昭氏（東京商船大学商船学部教授）
真野洋介氏（東京理科大学理工学部建築学科助手）
丸岡　昇氏（財団法人リバーフロント整備センター企画・広報部長）

■参加費：無料（非会員500円）
＊当日午前中は自由行動とし、野田の町を歩いて頂くこととしています。このため、参加者にはあらかじめ資料をお送りしますので、お早めにお申込みください。
＊パネルディスカッションの後で懇親会を持ちます（会費制）。ご参加の方は事前にお知らせください。

■申込先：
㈱日本都市総合研究所　高見公雄
FAX：03-3230-3408
e-mail：takami@nihon-toshi.co.jp
㈱TALO都市企画　須永俶子
FAX：03-3201-3890
e-mail：sunaga@bp.iij4u.or.jp

事務局より

1．新会員の紹介

2003年1月1日～2月28日の入会者は下記の通りです。（入会順、敬称略）

2月28日現在の会員数は、490名です。

正会員氏名	勤　務　先（ﾌﾞﾛｯｸ）
西川　孝雄	アーテック・にしかわ（関西）

準会員氏名	勤　務　先（ﾌﾞﾛｯｸ）
鈴木　雄一	京浜管鉄工業(株)（関東）

学生会員	学　校　名（ﾌﾞﾛｯｸ）
篠崎　弘晋	埼玉大学建設工学科（関東）

2．退会者（2003年1～2月）

正木勉、夢童由里子（敬称略）

3．住所変更等（敬称略）

氏　名	変　更　内　容（新）
菰田　朋子	太平洋セメント㈱ 〒285-0802　佐倉市大作2-4-2 Tel.043-498-3838　Fax.498-3850
澤　一寛	㈱日本カラーテクノロジー研究所 〒569-0814　高槻市富田町1-14-6-721　Tel.072-693-5792 Fax.693-5793
島　博司	㈲集環境計画 〒770-0802　徳島市吉野本町2-4-2 Tel、Faxは変更なし
高橋　泉	Architecture@ism一級建築士事務所　Tel.&Fax.0955-70-3565
竹内きょう	KYO+環境・構造企画 〒156-0054　世田谷区桜丘5-17-20-104　Tel.03-3420-1360 Fax.3420-1365
田村良二郎	尼崎市産業経済局産業労働部 〒660-8501 尼崎市東七松町1-23-1 Tel.06-6489-6448　Fax.6489-6491
林　正樹	ディックスペースアメニティ㈱ 〒101-0021 千代田区外神田2-16-2 Tel.03-5256-3252　Fax.3255-7740
樋口　忠彦	京都大学大学院工学研究科都市環境工学専攻 〒606-8501 京都市左京区吉田本町 Tel.&Fax.075-753-5121
松村　博文	北海道立北方建築総合研究所 〒078-8301　旭川市緑が丘東1条3丁目1-20　Tel.0166-66-4229
松山　茂	㈱都市空間研究所 〒550-0005　大阪市西区西本町1-9-18　Tel、Faxは変更なし

編集後記

関西に在住していると、佐世保という土地にはなかなか縁がありません。佐世保の位置を地図上に正確に落とせと言われても、複雑に入り組んだ地形とあいまって、なかなかにむずかしいことです。わたし自身は１２年前に佐世保市にお伺いしたことがあるのですが、ホテルの窓からみた葉巻型の潜水艦の姿が強烈に印象に残っています。軍港のまちとして発展してきた佐世保ですが、「佐世保もがんばってるな～」と、そんなことを感じさせる今号の特集でした。「人と場の活性化」という今年の年間テーマにふさわしく、市民や行政による活発な取り組みが行われているようです。某知事の「○○から日本を変える」ではありませんが、こうした活発な取り組みが日本各地に起こり、それらが連携・相乗することによって、日本を元気にし、都市環境のデザインを変えていく、そんな潮流を期待したいものです。

今号の編集にあたっては、佐世保市でただおひとりのＪＵＤＩメンバーである西脇敏夫さん（佐世保市理事　都市デザイン担当）に、全面的にご協力いただきました。この場を借りて心よりお礼申し上げます。

「部外者が見た佐世保のまち」といったことも掲載できればと思ったのですが、時間の制約もあり、断念しました。佐世保駅周辺再開発事業やポートルネッサンス２１事業などが完成するころには、是非、外部者の目からみた佐世保のまち、といった特集がくめれば、と思います。

西脇さんをはじめ佐世保の方々には早くから原稿をいただいていたのですが、わたくしの怠慢もあり、発行が大変に遅れてしまいました。この場を借りてお詫び申し上げます。

（アーバンスタディ研究所　森川稔）

広報・出版委員会

澤木　俊冏　　石崎　均
土田　旭　　伊藤　光造
近田　玲子　　加茂みどり
菅　孝能　　河本　一行
中嶋　猛夫　　森川　稔
櫻井　淳　　横山あおい
松村みち子　　吉田　慎悟
白濱　力　　作山　康